横尾忠則

Tadanori Yokoo

時々、死んだふり

ポプラ新書

244

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

はじめに

子どもというのはお遊びで人を殺したり、殺されたりして、死の疑似体験に妙に興奮するものです。死のなんたるかも知らないくせに、死を真似することに快感があるのだと思います。僕自身も、相手を殺すよりも殺されることを演じるほうが楽しかったですが。

子ども心にいずれ人間は死ぬものだとわかっていて、現実の死に遭遇する以前に、虚構で先に死んでしまおうという、この心理は一体どこからくるのでしょう。生きることは死ぬことであるという概念も知らないうちに、本能が子どもの魂に伝えているように思えます。

僕は昨年、突然予期しなかった急性心筋梗塞になって病院に救急搬送されま

CamScannerでスキャン

した。肉体の苦痛が頂点に達した時、「ああ、これが死か？」と思いましたが、幸運にも帰還してしまいました。ついこの間も、夢でまったく同じ体験をしました。激しい苦痛を味わった後に、そのまま山の頂上に魂となって帰るという内容です。いつか起こる死の瞬間のシミュレーションです。夢の中でまで「死んだふり」をした自分に、目覚めて思わず笑いそうになりました。

人間は、一生の間にこうして何度も「死んだふり」をしながら、いつか本番を迎えるようです。

僕は三〇になる前に自死を演じた作品を作り、死亡通知を業界紙に掲載して、処女作品集を『遺作集』と名づけて出版しました。

僕にとってのスタートは死からの出発です。「先に死んだもん勝ち」という幼児的遊戯を、この八七年間続けてきたような気がします。

二〇二三年七月

横尾忠則

CamScannerでスキャン

時々、死んだふり／目次

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

はじめに　3

第1章　本当に死にそうだった
——急性心筋梗塞で絵筆を持たなかった二週間
人生最大級の痛み、そして救急搬送　10
画家はアーティストではなく、アスリートである　18
痛みと恐怖　25
僕は病気と闘わない　33

第2章　僕も時々、死んだふり
生き物たちの「死んだふり」戦略　40
死亡通知と『遺作集』　46

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

自分のお葬式の夢を見た 55
自分の中の閻魔大王 61
ビートルズと三島さんに導かれて 67
下痢をしてインドがわかる 75
豊島横尾館は生と死の出会う場所 79
「死んだふり」はどこにでもある 86

第3章 面倒くさいで救われる

「面倒くさいことはやらない」主義 92
結婚は相手任せ、職業は運任せ 100
僕は人づきあいが苦手です 108
創作には「いい加減」が必要 113
頭を空っぽにするために 121
運命に従うか、逆らうか 127

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

自分は自分　133

第4章　新しい作品、新しい生き方

この年で手に入れた新たな画風　142
ハンディキャップが自然体　149
ダラダラアートと雲を眺める日　156
寒山拾得との出会い　162
寒山拾得は僕の精神的アイドル　169
「こんなん描けましたんやけど〜」　175
自分の寿命、絵の寿命　184

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

第1章　本当に死にそうだった

――急性心筋梗塞で絵筆を持たなかった二週間

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

人生最大級の痛み、そして救急搬送

世の中にはいろんな痛みがありますが、あれは間違いなく僕の人生で最大級のものでした。

昨年（二〇二二年）の七月、急性心筋梗塞になったのです。朝の五時頃、トイレから出たら胃に突き上げるような痛みがありました。胃のどこかが悪いのかなと思ったら、続けてすぐに胸がものすごく痛くなった。痛みでトイレの前でしゃがみ込んだままで、気がついたらうちのカミさんが横にいる。普段、僕は一階に寝ていて、カミさんは二階にいるから、アクシデントを察知して降りてきたのでしょう。

とにかく、今までで経験したことのない痛さ。後で知ったけれど、あらゆる

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

肉体の痛みの中で一番強烈なのが急性心筋梗塞なのだそうです。

正直、あの痛さから逃れられるのなら、このまま絶命してもいいと思うほどでした。そのほうが救われると思ったくらいで、不思議に死への恐怖はなかった。気絶はしなかったけれど、この日は記憶が飛び飛びになっているのです。

自宅に救急車を呼んでもらって、事務所を切り盛りしてくれている徳永にも来てもらって、いつも通っていた病院に搬送されました。救急車に乗ったら僕も少し安心して冷静になったのでしょう、周囲をきょろきょろ見回して、ロープや懐中電灯があるけれど、あれは何に使うのかと考えたり、今どこを走っているのかなどぼんやりと考えたりしていました。

病院に着くと、すぐにストレッチャーに乗せられて、どこかに連れて行かれる。周りはただただ慌ただしい。ストレッチャーの上で採血されて、心電図をセットされる。だから大変なことが起こっているのかなと感じたけれど、それでもまだ心臓が悪いとは思っていなかったのです。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

次にされたことは、看護師さんにいきなりパンツを下ろされて、尿道にチューブを入れられました。これは痛いを通り越してなんとも気持ちの悪いものでした。手術中に尿を催すと困るので、そうならないための処置らしいです。

これまで定期的に何度も心電図などの検査をしたけれど、お医者さんが問題ないと太鼓判を押していたので、内臓の中では心臓が一番強いと思っていました。それに僕は耳が悪いから、医師や看護師が言っていることが聞こえなくて、何が起こったのかわからなかったということもあります。

手術室に入ると、体中至るところ、足首から手首まで注射を打たれたような記憶があります。麻酔も打たれたが、部分麻酔だったので手首から血管を通して何かを入れていることはわかりました。それは心臓の検査のためのカテーテルで、心臓の左の血管が一本詰まっていて、さらに後ろの血管が一本狭くなっていることが判明したそうです。続いて、足の動脈から金属製のチューブを入れて心臓の血管を広げる手術（ステント手術）をしました。

これらは全部後から聞いたことなんですけどね。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

手術は一、二時間だったと思うけれど、その時のことはぼんやりとしか覚えていない。痛かったかどうか、苦しかったかどうかは、意識はあるんですがはっきりとした記憶がない。自宅で強烈な痛みに襲われて直ちに病院に搬送されて手術をするという非日常的な状況なので、そういうことを自分で理解したくないという気持ちもあったと思います。また僕自身、パニックやストレスを起こすといけないと思ってなるべく頭を空っぽにしようとしていたため、記憶がしっかりと残っていないのかもしれない。ともかくこの日のことは次々と忘れていったみたいです。

その中であの痛みだけは、はっきりと覚えています。手術中は少しでも体を動かすと危険なので、手術台にしっかりと固定されて身動きできず、腰や背中がひどく痛む。僕が体を動かそうとすると、お医者さんは「もう少しで終わるから、我慢してください」と言う。それから手術終了までの時間は、地獄でした。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

緊急手術の中で、印象的なことというか、そのおかげで自分の気持ちを少し落ち着かせることができた出来事が二つありました。一つは、以前聞いていた建築家の磯崎新さんの体験談。

明け方の痛みが胃のあたりから来ていたので、胃の病気かなと思っていましたが、手術中に手首の血管から何か入れるというのがわかって、以前磯崎さんから聞いた話を思い出したのです。

磯崎さんは建築家だから、非常にメカニックに体の構造的な話をする。そもそも僕は病気の話は嫌いじゃないけれど、切ったり挿入したりという話は他人のことでも少し怖い。僕が怖がっていることを知っているから、磯崎さんは喜々として自分の病気の体験を語ったんです。

その中で手首から何かを入れたとか、心臓の治療だったとか話されていました。すると同じ手術かもしれない、磯崎さんが大丈夫だったから僕も大丈夫だろうと少し安心しました。普段の知識というか、記憶があいう時に蘇って落ち着かせてくれることもあるから、ちょっと怖いけど、病気の話は経験者から

聞いておいたほうがいいと思いますね。

それからもう一つ、僕の心を落ち着かせてくれたのは、手術室に入る直前のカミさんとのやりとりです。

何が何だかわからないまま、手術室に入ることになった僕のところに、カミさんが近づいてきました。ストレッチャーで寝かされている僕の顔を真上から覗いて、なんと嬉しそうに笑って「バイバイ」と手を振ったのです。

「バイバイ?」、僕は横になったまま、思いました。

もうこの世で会えないというお別れなのか、また後で会いましょうという意味なのか、"See you again"なのか、"See you later"なのか、こういう局面なので一瞬そのことを考えました。

だけどともかく、彼女はものすごく嬉しそうな笑顔だったのです。それで、僕は落ち着きました。これから何が起こるんだろうか、手術はどの程度のものだろうか、終わった後どうなるのか、など考え出すときりがないけれど、カミ

CamScannerでスキャン

さんの「バイバイ」を聞いて、何も考えなくなったのは確かです。
それから少し悲しくなって、涙が流れました。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

手術室に入る直前、
近づいてきたカミさんが嬉しそうに笑って
「バイバイ」と手を振ったのです。
それで僕は落ち着きました。
それから少し悲しくなって、涙が流れました。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

画家はアーティストではなく、アスリートである

僕は病院に行くのが趣味というか、わりと好きなほうです。常に体の変化をチェックしようと思っていることと、実際に起こるあちこちの不調とで、二、三年に一度は入院しています。

入院は非日常的な異次元体験なので、それを創造に生かそうと病室をアトリエに勝手に変えて、そこで絵を描いたことも一度や二度ではない。病室で描いた作品のタイトルを、担当のお医者さんにつけてもらったこともありました。

でも今回は緊急事態だったし、ステントの手術もしたので、そんなに楽観的に過ごすことはできませんでした。お医者さんに「病院にはいつまでいるんですか」と聞いたら、「あと二、三日は入院してください」と言う。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

手術後は体中にチューブがいっぱい巻きついて、点滴や測定器などもあって、まるで自分が部品交換中のロボットのように感じました。水が飲みたいと思っても、自動販売機に買いに行くのすら大事（おおごと）だし、そもそも小銭を持ち合わせていない。しつこく家に帰りたいと頼んでも、「とにかく一晩は病院にいてください」という返事です。病室のベッドに横になっていても、気がちっとも休まりません。チューブが煩（わずら）わしいので、看護師さんに頼んで、無理やりいくつかを外してもらいました。

そういえば、この日は安倍元首相狙撃事件があったのです。周囲の人の会話で事件のことはなんとなくわかりましたが、正直、自分ことで精一杯でした。なんとか一晩我慢して、朝になってもう一度「家に帰りたい」と言ったのです。コロナで面会謝絶、家族とも会えない状態でしたから。看護師さんと少し揉めましたが、帰宅することができました。今考えるとかなり危ない冒険だったかもしれません。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

帰宅して二日後に病院に行き、手術をしてくれた先生に初めてお会いしました。

たぶん四〇代くらいの男性医師で、「今回の手術は非常にうまくいきました。神の手だと思うくらい正確にできました」と思いきり自画自賛してくれて、こちらも安心しました。改めて医学の進歩はすごいものだと感心しました。

でも、「横尾さん、二週間はじっとしていてください。文章はともかく絵を描くのは肉体作業なので駄目です」と言われて、がっかりしました。僕の不満げな様子に、先生はさらにこう言って脅かしてきました。

「日展に出品した画家が心筋梗塞で手術して、退院直後に絵を描いたら、すぐに再入院になったんです」

それからの二週間は長かった。退院した翌日から毎日アトリエに通ったけれど、先生との約束を守って絵筆を一切持たないようにしました。体は普通の状態に戻っていて、自分には病人という感覚がないから余計につらかった。これまで自分で描きたくないと思って二週間くらい描かないことはしばしばありま

したが、人から言われて絵筆を持てないというのは初めてのことだったのです。代わりの楽しみといっても、耳が悪いのでテレビを見たり、音楽を聞いたりすることもできず、読書もすぐに目がしょぼしょぼするし、やることがなくて退屈でした。しかも次々に構想が湧いてきて、本当に困りました。

そうして二週間絵を描くことをやめて、訪れた一五日目はいつもと違う一日でした。

なんとたった一日で、一〇〇号の絵を三点も描いてしまったのです。午前中に一点、午後の三時頃までに一点、夕方にもう一点。

禁断症状が解かれたわけですが、きっと体が求めていたのでしょう、まるで何かに取りつかれたかのように、絵を描き始めました。これまではせいぜい一日一点で、こんなペースで絵を描くことはなかった。

その時の自分を表現すると、まさにアスリートのような気分でした。それも、完全なるアスリートというか、野球にたとえれば、ピッチャーの投げた球をそ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

のまま打って、さらに投げた、打った、走った、そういう感覚であっという間に三点が完成しました。体が求めるままに無心でキャンバスに向き合って、気づくと作品ができあがっている。僕は画家というものは、アーティストではなくてアスリートだなと実感しました。

その時描いたのは寒山拾得。このシリーズは心筋梗塞になる前から描いていたものです。寒山拾得のことは後で話しますが、乞食のような姿をした二人の禅僧で、何ものにも縛られない、これ以上の自由はないという人物だから、それもよかったと思います。

手術後、休養明けすぐに何点も描くのはまずいだろうと頭で理解していましたが、体がその判断を許さなかったのかな。実際にその後、三日くらいは何も描かなかったから、疲れたことは事実です。ランニングをしている人がいい気持ちになることをランナーズハイというけれど、それに近い状態、つまり気持ちがよくなって絵筆を止めることができないペインターズハイになったのかも

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

しれません。
病気をきっかけに僕と絵の関係は少し変わりました。いい加減というか、どうでもいいというか、頑張って絵を描こうという気持ちがなくなっていきました。僕は以前から無心で絵を描きたいと思っていましたが、今回の急性心筋梗塞を経て、それがいつもできるんじゃないかという気がします。僕が望んでいた執着のない絵が描けそうです。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

無心でキャンバスに向き合って、
気づくと作品ができあがっている。
僕は画家というものは、
アーティストではなくて
アスリートだなと実感しました。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

痛みと恐怖

僕は今年（二〇二三年）で八七歳です。何が起きてもおかしくない年齢なので、ある程度は覚悟していますが、痛い、苦しい、のは嫌ですね。もちろん痛みを感じるのが生きている証拠だとわかっていても。

振り返ると、心臓の痛みは本当に強烈でした。まさに、息ができないくらい。この状況から逃れるには死ぬしか方法はないと思いました。死が駆け込み寺みたいに見えて、そこに飛び込めば助かると。

その時は、死に対する恐怖感はゼロでした。ふつうは死ぬかもしれないという局面になったら死に対する恐れや抵抗感が出てくると思うし、僕自身、以前は誇大妄想的といえるほど死を恐れていたけれど、それがまったくなかった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

どうしてだろう、不思議なことだと思っていたのですが、次のようなことに思い至りました。

一般的に死を恐れるのは、自己という存在が消えてしまうからでしょう。もし人間の実体が肉体ではなく霊魂にあるとするならば、肉体の死は恐れるものではなくなります。今、僕は死んだら肉体を脱ぎ捨てて霊的な存在となって別の次元に行くと思っているので、死は一つの区切りにすぎません。そういうことが背景になっていたと思います。

とにかく猛烈な痛みだったので、それから逃れるために絶命したとしても、それが宿命だと思うだけです。

これまでに経験した痛みの話では、痛さの種類は違うけれど、一九七〇年に足の痛みで歩くことができなくなり、足を切断する可能性があると言われた時がありました。この時のショックは大きなものでした。

これは、タクシーに乗っていた時に追突されてむち打ち症で二ヵ月入院した

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ことが始まりです。ずっと寝たきりだったので、退院前に頑張って歩行訓練をしたら、そこから足が痛くなって、歩くのが難しくなりました。足の治療のために別の病院に入院したのですが、ちっともよくならず、最初は右足、続いて左足も痛くなって、立っていることができなくなる。足の指先が黒ずんできて、くるぶしまで黒ずみが広がったりして、足を切断する可能性もありました。医師たちが「動脈血栓らしいので、足を切らないと危険だ」と話しているのを聞いたのです。

たまたま病室に高倉健さんと浅丘ルリ子さんが揃ってお見舞いに来てくれて、それが週刊誌の記事になって、「横尾忠則　片足切断の危機」という見出しにもなりました。するとその記事を見た隣の病室の老人（その老人はすでに片足を切断していた）が僕の病室を訪ねてきて、「来週もう一本の足を切る手術をすることになっている。あなたも早く切ったほうがいいですよ」と、笑いながら話しかけるのです。僕は半ば人生が終わったような気持ちになりました。

足を切断される可能性があったので、急いでその病院を退院しました。その

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

後、東洋医学で治療してもらって回復したのですが、あの恐怖は忘れられません。

今回の急性心筋梗塞は、痛さのレベルではそれを超えていました。

それにしても、痛みから逃れるために死んでもいいと思い、しかも死への恐怖感もないなんて、今思うといい経験をしました。僕は死の入口を垣間見たような気がします。

大病をすると、人生観が変わるとよく言いますが、自分にはそれは当てはまらないような気がします。

あの時間はすでに僕の前を通過してしまい、目の前から消えてしまいました。だからその後の生活が変わったかとか、自分の認識が変わったかと聞かれても、特別なものは何も残っていません。あの一瞬は悪夢のようで、瞬間的に地獄を見たような気がしますが、それで終わり。

あの時のことを追体験したり、頭の中で反復して、自分の中の問題として考

えるということもありません。もちろん、痛いのでもう一度体験したいとも思いません。だけど一〇ヵ月後に夢で、あの痛みそのままを体験して、僕の霊魂がとんがった山の頂上を目指して飛翔したのです。もう一度、同じ苦痛を夢が味わわせたのですが、あの夢は一体なんだったんでしょうか。今度、本当に死ぬ時はこうなるぞと、シミュレーションさせたのですかね。

結局のところ、病気の恐怖を増幅させているのは、これから起こるかもしれない未来を不安に思う気持ちかもしれません。病気をしていない人がその病気にかかったらどうしようと想像している時のほうが怖いと思う。僕は体験したから言えるけど、イマジネーションの中の恐怖のほうが現実の恐怖よりも強いんじゃないですか。

今回の心筋梗塞で一つ変わった点があるとすれば、不眠症がなくなったことです。僕は昔から不眠症に悩まされていました。

というのも、寝る時に、眠る瞬間を見届けよう、意識ある状態から無意識に

なる瞬間はどんな感じだろうか、などと考えてしまうのです。それで、なかなか寝つけなかった。

無事に寝つけても、夜中に目が覚めてしまい、そのままテレビをつけて朝までずっと画面を見るともなしに見ている、ということもよくありました。作家の柴田錬三郎さんと週刊誌の連載で一年間ホテルに缶詰めになっていた時には、毎朝二人で「昨晩は一時間しか寝られなかった」「ほとんど寝ていない」などと、不眠比べをしていたほどです。

年を取ってからは、寝て二、三時間すると目が覚めてトイレに行く。それからテレビをつけて深夜番組を見るのが習慣のようになりました。ヨーロッパの風景の番組をよく見ていたけど、小一時間くらい見て、疲れてまた寝て、朝方もう一度起きるというペース。そのせいか寝不足な感じが一日中続いていたこともしばしばあったのですが、急性心筋梗塞以後はすぐに眠れるようになったのです。

身近な問題でわからないことがあって、それを解明しようとあれこれ考えた

り調べたりすると、さらに新しい問題に広がって解決しないことがあります。むしろそういうことのほうが多いかもしれません。

だから僕は、考えないことにも意味があると思っています。不眠症もそういう感じで、寝なければいけないのになぜ寝られないのだろうと考え出すと、頭が冴え出してきてまた眠れなくなる。だから不眠症は、自分の考えが起こす病気なのでしょう。

若い頃から不眠症がずっと続いていて、これは僕の持病だと思っていたけれど、心筋梗塞の後は出ていない。寝られなければ寝られなくてもいいじゃないか、という居直りの気持ちに自然になっていったのだと思います。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

病気の恐怖を増幅させているのは、
これから起こるかもしれない未来を
不安に思う気持ちかもしれません。
イマジネーションの中の恐怖のほうが
現実の恐怖よりも強いんじゃないですか。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

僕は病気と闘わない

絵は当然ながら自分の気持ちに影響されます。

年が明けて、生きるのが面倒くさいと考える時があって、そんな時は絵も「メンドーくさい」絵になっていたと思います。重苦しく考えたり、精神が苦しむと絵も重くなる。そもそも重苦しい絵は疲れますね、描くほうも、観るほうも。

絵は軽くなきゃいけないし、心が軽やかになって描く絵は軽くなります。一方、考えた絵はどうしても理屈っぽくなります。余計な計算や効果や、他者を意識するからです。

ピカソ、キリコ、マチス、デュシャン、ウォーホルは皆軽い。社会が重苦しくなると絵も重苦しくなって重いのを好む。人生は軽やかでなければいけない。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

そして単純でなければいけない。絵も同じ。

入院、手術の後は、病院で心電図やエコーの検査を受けました。

お医者さんは「もう心臓は大丈夫でしょう」と言ってくれたので、安心しています。心臓の状態がどうとか、血管がどうとか、血液がどうとかの説明は忘れてしまったけれど、先生が大丈夫と言うから大丈夫だと思っています。

こうなっていろいろな人から聞いたのだけれど、知り合いや知人の親族の方が心筋梗塞で亡くなられていたことがわかりました。日本人の死因では、がんの次が心臓疾患ということですから、本当に気をつけないといけない。

それから僕の知っている作家の闘病記を読むと、病院や医師と闘っている人がいることもわかりました。なかにし礼さんや高橋三千綱さんがそう。二人はがんでしたし、発症の年齢も違うので、単純に僕の場合と比べられないけれど、自分の病気と闘ってさらに病院とも闘っている。僕にはそういうエネルギーはないですが。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

二人の闘病記を読むと、自分で病気のことや治療法のことを納得がいくまで調べて、医師や病院を追求している。そして病院を移って医師を変えて（民間療法や積極的な治療をしないことも含めてですが）、自分の望む治療をしようとしています。

これは人それぞれの性格で、僕のように「面倒くさいからお任せします」という選択肢は彼らにはないでしょう。作家は画家に比べると、観念的ですからね。

彼らからすれば、僕は病気に対して投げやりで、何も努力しないというふうに映るかもしれません。そう言われればたしかにそうだけど、これは僕の性格です。単に面倒くさいだけで、それで自分で納得しているわけです。そんな詳しいことを知ったってしようがないと思うから。

その根っこには、運命に従って生きるか、運命に逆らって生きるかの二つの生き方があるように思います。僕は、自分に与えられた運命、つまり自分の肉

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

体に与えられた宿命が作り出す運命に従って生きてきました。だから今回の病気についても、その運命に従おうと思っているのです。

けれども、他の人にその生き方が当てはまるかというと、それはわからない。運命に逆らって、運命と闘って、それでうまくいく人がいるかもしれない。ただ僕にはそれが「面倒くさいこと」になるし、「面倒くさいことはしたくない」という結論になるのです。どこかラテン系ぽいんですかね。

運命は生まれる前に決められたもの。それに従って生きるか、それに逆らって生きるか、人間には自由意志が与えられているわけです。たぶん、ある時は運命に逆らって、ある時は運命に従うという、そんな都合のよいことはできないと思います。性格というか、タイプというか、どちらを選ぶかがその人の生き方です。

僕は実母の体が弱かったので横尾家に養子に出されましたが、養父母の育て方や教育が僕の性格を作り上げたと思う。養父母は僕を大事にしてくれて、ある意味で甘やかして育ててくれて、僕は受け身で面倒くさいことは嫌だという

性格になりました。養子になるというのは自分では選べないことだから、運命というしかありません。そして同じように、急性心筋梗塞になったのも運命だと思っています。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

人生は軽やかでなければいけない。
そして単純でなければいけない。
絵も同じ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

第2章　僕も時々、死んだふり

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

生き物たちの「死んだふり」戦略

子どもの頃の遊びで、友達を驚かせようとして、死んだふりをしたことはないですか。息をひそめて、身動き一つしないようにして、相手が来るのを待っているうちに、待ちきれなくて動いてしまったとか。うまく死んだふりをしていたのに、くすぐられて思わず吹き出してしまったとか。

以前、僕は生物の「死んだふり」をテーマにした本の書評をしたことがあります。昨年（二〇二二年）一〇月の『朝日新聞』書評で取り上げた、『「死んだふり」で生きのびる』（宮竹貴久著、岩波科学ライブラリー、二〇二二年）という本です。

この本は「生き物たちの奇妙な戦略」というサブタイトルが示すように、生

物学者によるまじめな研究書です。生き物にとって「死んだふり」という戦略は生き残るための手段であるらしく、それが生き物の進化した行動だと著者は仮定して、研究を続けています。

動物が死んだふりをするのは、僕も子どもの頃、カエルを捕まえてお腹をなでると動かなくなるので知っていました。この本によると、学問的にこの「死んだふり」（フリーズ）について研究した人はこれまでにいなくて、宮竹先生が世界初ということです。コクヌストモドキなど小さな甲虫についてさまざまな実験を繰り返して、死んだふりをするグループとしないグループがあることを突き止めます。そして捕食者であるクモが近づいた時、死んだふりをすると襲われる確率が明らかに低くなると結論づけています。

生物にとってこの戦略は有効で、ヒト、オポッサム、ヒツジ、キジ、ヘビから、サメ、スズキといった魚類、さらにはミジンコにもこの死んだふり行動が観察されているそうです。捕食者であるサメがこの行動をとるのはなぜか、ま

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

たミジンコにとって死や死んだふりはどんなものだろうか、などもっと知りたくなります。

クマに遭遇したら死んだふりをしろ、という話を聞いたことがありますが、クマは死肉も食べるから間違いらしい。イソップの寓話「クマと旅人」で広がったのかな。クマはともかく、動くものを襲う習性を持つ動物（捕食者）がいて、死んだふりをする生物がいるということは昔から知られていたのでしょう。

そもそも死んだふりをするのは、非常に怖いこと。虫でもカエルでも敵というか捕食者の目の前で、大の字に仰向けになって、「はいどうぞ、殺してちょうだい」と体を差し出すわけだから、勇気というか、信念というか、そういうものがないとできないことです。虫にとっては本能的にそうなるのかもしれないけれど、人間にとっては相当の覚悟が必要です。

生きるか死ぬかの瀬戸際で、無防備になって相手に「好きにしてください」と任せてしまう。これは運命に従うということにも似ている気がします。人生

CamScannerでスキャン

の中では運命に襲われるというのか、とても厳しい状況になることがあるけれど、その時に神様に身を預けるように運命に自分を預けてしまう、そういう覚悟が大切だと思います。

でも運命に従うことの中に遊びの要素がないとうまくいかない。

僕は子どもの頃、戦争ごっこやチャンバラごっこをやりました。鉄砲でバーンと撃つ真似をすると、相手は「やられた」とか言って倒れるというのがルールです。お互いにその遊びのストーリーに入り込んでいるから、死んだ真似をすることに疑問は持たなかった。昔の男の子は死んだ真似を何回もやっていたけど、今の子どもはそういう遊びはしないかもしれないですが。

俳優の宍戸錠(ししどじょう)さんが近くに住んでいて、どこかで聞いた話ですが、宍戸さんがアクション映画の撮影から帰ってきたら、お子さんが銃を向けて「バーン」とやった。そうしたら宍戸さんは本当に撃たれたかのようにバタッとひっくりかえって、そのままずっと倒れていた。いつまでも起きてこないのでお子さん

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

がびっくりして、「どうしよう！　お父さん、撃たれて起きてこない！」と大騒ぎになったということです。

先の新聞書評では本の内容紹介をしたあと、自分に引き寄せて、「かつて死亡通知を新聞に掲載したり、遺作集を出版したりしたことがあるが、あれも『死んだふり』をして生きのびる手段だったのだろうか。また、僕の作品のほとんどが未完成であるが、これも創造的『死んだふり』で、次作への延命手段なのであろうか」と書きました。

「死んだふり」を自分の人生に重ねてみると、新しい発見がありそうです。ただし、宍戸錠さんのエピソードのように、「死んだふり」にはちょっとユーモアや遊びの要素がほしいものだと思っています。

CamScannerでスキャン

そもそも死んだふりをするのは、
非常に怖いこと。
勇気というか、信念というか、
人間にとっては相当の覚悟が必要です。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

死亡通知と『遺作集』

僕は死をモチーフにした作品を多く作っています。

たぶん、それは僕が一人っ子で、両親（養父母）の死を極端に恐れていたことが原因です。両親が死んだら僕は一人ぼっちになってしまうというのが、僕にとっての具体的な恐怖のイメージでした。

そして、それならば恐怖の対象である死と一体化してしまえば怖くなくなるのではないかと考えました。自分が死の対象となることで、死を超えようとしたのです。

一九六五年に『TADANORI YOKOO』というシルクスクリーンのポスターを作っていますが、真ん中に首吊りをしている自画像があって、「29歳でクラ

イマックスを迎え僕は死んだ」という意味の英文が入っています。僕が注目を集めるきっかけになった作品ですが、今思えば、このポスターも「死んだふり」行動の一環だったのかもしれない。

先述した「死亡通知」とは、一九六七年に『デザインジャーナル』という業界紙に、黒枠で自分自身の死亡広告を出したものです。僕の三〇回目の誕生日（六月二七日）に「老衰のため三十歳の天寿を全うし永眠致しました」という告知を出し、葬儀・告別式を兵庫県西脇のモダン寺（もちろん架空のお寺です）で行うと案内したのです。

その時の喪主はうちのカミさん、葬儀委員長は田中一光（いっこう）さんの名前を出しました。これが他のメディアにも紹介されて広がり、事務所にお香典が送られてきたり、大阪に住んでいた実父がびっくりして上京してきたりしました。

その頃、僕はデザイナーとして東京で生きていかなければならないという時期でしたが、目の前に大きな壁が立ちはだかっているのを感じていました。そ

CamScannerでスキャン

の壁を越えるためには、相当ばかばかしいことをやらないといけないと決意したのです。

死亡広告・死亡通知を出せば、本気にして怒る人も当然出てくるだろうし、批判の対象にもなるでしょう。その一方で、面白がる人がいるかもしれない。その否定的要素と肯定的要素を全部受け入れて、一種の遊びともいえる表現をしようと思ったのです。

それは直感でやりました。偽の死亡通知なんて社会のルールを無視しているし、験の悪いことでもある。いってみれば、反社会的行為です。だからあの時、先輩の亀倉雄策さん、田中一光さんがどう思うかと考えていたら、きっとできなかったでしょう。大して考えずにパッとやってしまったから実現できた。でも、その後のことは自分で引き受けるという覚悟はあったと思います。

今振り返ると、上京して働きだした僕は、ずいぶん追い詰められた状態だったのかもわからない。そこから脱出するためには、これしかないと思ったのです。論理的にやったらできないことです。自分の中にある幼児性、インファン

ティリズムがやらせたわけで、死んだふりには、やはりある種の幼児性が含まれています。

ある雑誌に頼まれて、事故でフロントガラスが割れた自動車のボンネットの上に僕が血だらけで倒れているという写真を掲載したのもこの頃でした。また、一九六八年に刊行した初めての作品集を『横尾忠則遺作集』（學藝書林）というタイトルにしました。この本には、青山墓地で僕の葬儀をしている写真が掲載されています。友人やカミさんが喪服姿で立っている。これは寺山修司さんと編集者の八木岡英治さんがプロデュースしたもので、僕がニューヨークに行っている間に勝手にやったものです。

それから、実現しなかったけれど、僕は同じ頃にデパートで「遺作展」もやりたかったのです。よくデパートで文豪の遺作展をやるでしょう、机や持ち物を並べて部屋を再現したりする展覧会。伊勢丹のような新宿のど真ん中のデパートで、壁面の上から下まで「横尾忠則遺作展」という大きな垂れ幕をパー

CamScannerでスキャン

ンと垂らすのをやってみたかった。でもデパートの担当の人が「これはちょっと……」と乗ってこなかった。デパートとしては嘘の遺作展はまずいという考えだったのでしょう。

デパートの展覧会といえば、一九七〇年の五月に「横尾忠則全集展」というのを銀座松屋でやりました。入場無料でしたが六日間で七万人も入ったといいます。三島由紀夫さんが見に来て、「こんなに人が入るなら俺も展覧会をやろう」と言って、すぐに企画を進めたようです。この年の一一月一二日から一七日まで、池袋の東武デパートで「三島由紀夫展」を開くのですが、会期が終わって一週間後に自決されました。

自分自身で死亡通知を出して、『遺作集』を刊行するというのは、現代アートのパフォーマンスの一つと見ることができるかもしれません。僕はハイレッド・センターの「シェルター計画」に参加するなど、現代アートのパフォーマンスを少しは知っていました。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ハイレッド・センターは、高松次郎、赤瀬川原平、中西夏之の名前を取った前衛美術のグループで、僕は赤瀬川さんと展覧会のオープニングなどで顔を合わせていました。一九六四年一月「シェルター計画」の招待状が届いて、帝国ホテルに来いという。核戦争の時代に個人用のシェルターを作るということで、ホテルの一室で徹底した身体測定と写真撮影をされて、代金一万円（だったと思う）を払いました。申し込み用紙には岡本太郎、オノ・ヨーコ、瀧口修造、ナム・ジュン・パイクなどの名前が並んでいた。注文した個人用シェルターは届かなかったけれど、もし届いていたら、そこに入って棺桶気分を味わっていたかもしれない。

でも、アートの枠組みの中だけでは駄目だ、大衆を巻き込まないと面白くならないと僕は思っていました。スキャンダリックに扱われ、事件となって初めて人々は関心を示します。美術館やギャラリーでやると、それはコンセプチュアルな作品になって、その中だけの出来事になってしまう。だから遺作展はデパートでやりたかったのです。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

僕はデザインを含めて、アートはスキャンダリズムがないと駄目だと思っています。大衆が好きなのはスキャンダルです。週刊誌だって「衝撃のスキャンダル！」がたくさんあるほうがよく売れる。だからアートも多くの人に見てもらったり、商品化を意識したりするには、その要素がないといけない。

たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』では、モデルは誰か、微笑みの意味は何か、など大衆を巻き込んだ議論が続いています。またピカソの『ゲルニカ』はスペイン内戦のフランコ側を批判する作品なのか、戦争の悲惨さを表現しているのか、など政治的なテーマも含めて議論されました。作品はスキャンダルに包まれると、より輝くのではないでしょうか。

アートの中で、デザインは明確に機能を持っています。その機能性というデザインの思想を、死亡広告や『遺作集』でひっくり返したいという気持ちもありました。そう考えると、先に「デザイナーとしての壁」と言いましたが、それは機能性や効率性、大きくいえばモダニズムというデザイン思想だったかもしれないですね。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一連の死んだふり行動は、デザイン界をばかにしたものでもあったので、その後どうなるかと思ったけれど、やってみると、どうっていうことはなかったです。「やればできる」「やったもん勝ち」ということを、そこから学んだ気がします。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

アートはスキャンダリズムがないと駄目。
多くの人に見てもらったり、
商品化を意識したりするには、
その要素がないといけない。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

自分のお葬式の夢を見た

僕は自分のお葬式の様子を夢で見たことがあります。夢としてはなかなか愉快な夢です。

死んだ僕は雲になって、上空から自宅を眺め下ろしています。下では喪服の人たちが慌ただしく動き回っている。お葬式の準備をしていて、葬儀の花も届き始めた。

ふと見ると、うちのカミさんがギャラリーの人と、遺影をどれにするか、いろいろな写真を並べて話し合っている。どの写真がいいか迷っているから、それならいろいろな時代の写真を並べて、お焼香に来た人が僕とつきあっていた時期の写真のところで手を合わせればいいじゃないか、というアイデアをカミさ

んに波動で送る。僕は死んでいるから声が出せないので、波動で伝えようとするけれど、なかなか受け取ってくれません。

一方、玄関では新聞社の担当の人が受付のテーブルを並べている。けれどもテーブルはむきだしで、白い布がない。僕はこういう時は白い布を置かなければ駄目だよと波動を送る。するとその人はある程度キャッチして、自分のポケットから白いハンカチを出して、テーブルの上に広げる、僕はハンカチじゃない、もっと大きい布でなければ、ともう一度波動を送る。すると、白いハンカチがどんどん大きくなって、テーブルを覆うという不思議なことが起こるのです。

自分のお葬式を上から冷静に眺めて、浮かんだアイデアや修正点を波動で送るというリアルな夢でした。これは「死んだふり」というよりも、臨死体験に近いのかもしれない。

このことをどこかで書いたら、美術雑誌の編集部の人が「このお葬式を実際にやってみませんか」と提案してきました。成城の駅から自宅まで、指を差し

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

て「横尾家」と書いてある張り紙を貼って、友人に喪服を着て集まってもらって、この夢を再現するというものです。でも、前に言ったように『遺作集』ですでに疑似葬式をやっているので二番煎じになるし、喪服で並ぶ人たちにも迷惑だろうからと断りました。

そういえば、寺山修司主宰の天井桟敷の第一回公演『青森県のせむし男』（一九六七年）で、僕が舞台美術を担当した時、葬儀の道案内の指差しの形を拡大して舞台に置いたことがあります。自宅でお葬式をしなくなってからあまり見かけなくなったけれど、あの指差しデザインはシンプルでわかりやすく、モダンデザインの傑作ですね。

これまでのお葬式で、これがよかったというものは特にありません。お葬式のことでと聞かれれば、覚えていることが二つあります。一つは三島由紀夫さんのお葬式で、自決から二ヵ月後に築地本願寺で行われました。川端康成さんが葬儀委員長をつとめていて、不測の事態が起こる可能性もあるので、その場合は直ちに葬儀を中止しますというようなことを事前に話していました。結局、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

当日は何も起こらなかったけれど、参列している最中もずいぶんと緊張したことを覚えています。

もう一つは西脇での高校の先生のお葬式のことです。高校の先生が亡くなられ、山の中のお寺で葬儀が行われたので、僕を含めて在校生たちが参列しました。

お坊さんがお経を読み終えて、引導を渡すという意味で、一喝（いっかつ）したのです。突然「かーっ」と大声を出したので、なんだか急におかしくなって、僕は思わず声を出して笑ってしまったのです。そうしたらそれが連鎖して、みんな笑い出した。生徒たちはみんな笑いをこらえていて、僕が「わははは」と笑ったとたんに、全員が吹き出してしまった。

お葬式で笑うのはまずいのでしょうが、緊張が極限までくると笑い出したくなる。あの時の大笑いの張本人は僕です。

遺影のことや白い布のことなどいろいろ書きましたが、自分の葬式については、別にやらなくていいと家族には言っています。人騒がせだし、お葬式に行

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

くのも大変だし。義理や体裁で行く人も少なくないだろうから、お葬式はしなくてもいいと思う。何かするならば家族葬で十分です。

最近は「偲ぶ会」というのもあるけど、僕はやってほしくない。その会をやる頃には僕は向こうに行っていて、そこに行けないわけだから。誰が来てくれたとか、向こうでそんなことを考えてもしようがないし。

瀬戸内寂聴さんは晩年、よく自分のお葬式の話をして、僕に弔辞(ちょうじ)を読んでほしいとか、葬儀委員長になってほしいと何度も言っていましたが、その都度断っていました。どうして死後に執着されるのか、僕にはよくわかりませんでした。お別れ会が行われましたが、僕はあえて欠席しました。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

自分のお葬式を上から眺めて、
浮かんだアイデアや修正点を
波動で送る夢を見ました。
これは「死んだふり」というよりも、
臨死体験に近いのかもしれない。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

自分の中の閻魔大王

「死んだふり」は、死の側から生をとらえることにもつながると思います。似た言葉に「死んだつもり」「捨て身」などがありますが、僕の死亡通知や『遺作集』は社会的な死につながり、大きな批判にさらされる可能性もあって、捨て身の試みといえるかもしれません。

今年（二〇二三年）の三月にワールド・ベースボール・クラシック（ＷＢＣ）がありましたが、村上宗隆選手は前半まったく打てなかった。その時、誰かが「まだ捨て身になっていない」というようなコメントをしていました。

村上は史上最年少で三冠王になって、日本の最強の打者として四番を任されていた。野球のことは詳しくわからないけれど、三振したらみっともないとか、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

四番だからせめてヒットくらい打ちたいとか思っていて、スイングが小さくなっていた可能性はあるでしょう。恥をかいてもいいと自分をさらけ出して、自分を無にすることが必要なこともあります。そういう捨て身の心が役に立つ局面があると思う。

死の側から生をとらえる時には、死んだらどうなるか、という問題を避けて通れません。「死んだら終わり」「すべて無になる」と思っている人も多いでしょうが、僕は「向こう側の世界がある」と思っています。

死後の世界には、こちらの世界の富や名誉や地位や知識や権力は持っていけない。全員が等しく無名の存在になるわけです。こちらの世界で真心を持った生き方をしていないと、向こうの世界で大変だと思います。向こうの世界には、天国と地獄があるかもしれないのですから。

僕は生きている時の相対的な生、それの結果が死後の世界を形成すると思っています。つまり、その人がどう生きたかによって、死後の世界がどうなるか

が決まるということです。

「死んだ後どうなるのか」と僕に聞いてきた人がいたので、「生きてきた時の想念や思いがそのまま死んだ時に具現化する、あるいは形を変えて具現化するので、こちらの世界と向こうの世界はイコールでつながるのではないですか」と答えました。その人は「怖い、怖い」と言っていましたが、ということは、こちらの世界でかなり怖いことをやっていることになります。

だから、死んだらどうなるかということを心配するよりも、今を一生懸命生きることが大事です。それは特別のことではなくて、自分の納得した生き方をするということ。さまざまな執念や我欲をなくすようにする、そのように考え方を変えればよいはずです。

近年よく断捨離（だんしゃり）という言葉が使われていて、物を整理しなさい、物を捨てなさいという意味になっている。けれど本来はもっと抽象的なもの、その人が抱いている執着を捨てて、空っぽになって向こうの世界に行くことを指すのではないでしょうか。

CamScannerでスキャン

記憶も一種の執着です。過去の自分、過去の時間をいつまでも残そうとしているわけだから、自由になれません。生きているうちに、執着になりそうな記憶を断捨離しておくことをお勧めします。

死んだ時に問われるのは、その人の人間性だと僕は思います。かつての日本人の多くは、死ぬと閻魔大王がその人の罪を裁いて、極楽（天国）に行くか地獄に行くかを決めることになっていると考えていました。

閻魔大王は自分の中にいると僕は思っています。自分の中の閻魔大王は自分の長所、短所など、ありとあらゆることを知っている。他人だったら嘘をついたり、ごまかしたりできるけれど、自分にはそれはできない。だから自分の中の閻魔大王と向き合うのは怖いですよ。怖いから、死後には何もない、無になると言っている人が多い気がします。

目に見えないものは認めない。科学的に証明されないものは認めないというのが現代社会の発想です。でも目に見えないものがあってもいいという視点に立ってみるのも悪くない。時には死んだふりをして、自分が死んだらどうなる

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

か、生きていて一番大切なことは何か、などを考えることは意味あることだと思います。

閻魔大王に触れましたが、本当は仏教書を読めばいろいろなことがわかるはずです。けれども仏教書は難しい。僕はその代わりに週刊誌を読んでいます。そこに書かれているスキャンダルには、欲にまみれた人間がどうなるかが現れています。因果応報、自業自得という仏教の教えをそこから読み取ることができるはずです。どんなに偉い人でも、やったことは全部自分に返ってくるのですから。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

死んだらどうなるかということを
心配するよりも、
今を一生懸命生きることが大事です。

CamScannerでスキャン

ビートルズと三島さんに導かれて

僕は一九七四年から九四年までの間に、インドに七回行っています。「インドが好きなんですか」とか「インドに呼ばれているんですか」とか聞かれるけれど、まあ成り行き任せでそうなっただけです。今になると、インド自体が死んだふりをしている国のように思えて、それを体験しようと何回も訪ねたのかなと思います。

インドに行った動機は、ビートルズと三島由紀夫さん。三島さんからは「君はインドに行って、死を通して生を学んできなさい」と送り出されました。

ビートルズはデビューした時から、あのマッシュルーム・カットとメンバー四人の顔の絶妙なバランスに惹かれて、ずっとファンでした。そのビートルズ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

が全員揃って一九六八年に訪れたのがインド。彼らは、ヒマラヤ山麓のリシケーシュにあるマハリシ・マヘーシュ・ヨーギーのアシュラム（道場）に滞在して、瞑想やヨガの修業をして、その間に曲を四〇以上作りました。

マハリシはインド哲学に基づく超越瞑想（トランセンデンタル・メディテーション＝TM）の創始者で、ヒッピーのグル（導師）として有名でした。

この背景にはヒッピー文化があります。西欧の物質文明に行き詰まりを感じていたヒッピーは、インド哲学やヨガや禅など東洋の精神文化に関心を持ち、それを実践しようとしていた。ヒッピー・レボリューションの最盛期の一九六七年、僕はニューヨークに行きました。そこには「ハレ・クリシュナ」を唱えるクリシュナ・テンプルの宣教師がいたり、長髪でヒゲをはやしてインディアン・パジャマを着る若者たちがたくさんいました。

彼らは知識ではなく体でインドを感じようとしていて、インド・ファッションをして、マリファナ（大麻）を吸って、ヨガや瞑想をする。そしてインドに行こうとしていた。ビートルズもそうだけれど、インド音楽を取り入れたロッ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

クバンドは少なくなかったし、ヒンドゥーの神々を描いたお札や本もあちこちで売っていました。

あの頃のニューヨークはロックとポップアートが尊敬される対象でした。音楽とビジュアルが第一だったのです。ややこしい理屈を言う前に、マリファナを吸ってトリップすればこの現実と異なるもう一つの現実が開けるという発想だったのでしょう。ドラッグ（麻薬）のことを「インスタント悟り」と言っていましたから。

大きくいえば、インドが輪廻転生してニューヨークの文化の中に浸透したようなものです。そのきっかけはドラッグでしょう。アメリカではドラッグは基本的に禁止されていましたが、インドでは自由だったので当時の人々はインドへの憧れを一層強めました。

翌一九六八年の正月に三島さんと会って、ニューヨークのことを話しました。そうしたら三島さんは、六七年の九月から一〇月に旅行したインドのことを話してくれました。とくにベナレス（ヴァーラーナシー）で死者を焼いてガンジ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ス川（ガンガー）に流す様子を詳しく描写して、僕を怖がらせます。『豊饒の海』の第三巻『暁の寺』で主人公の本多繁邦がインドを訪ねていますが、これは三島さんの体験そのものでしょう。

僕はニューヨークのヒッピー文化体験からインドを楽園のように思っていたけれど、三島さんは現実のインドを教えてくれました。そして、「インドには、人それぞれに行く時期が自然に訪れる」と、僕がまだインドに行く時期ではないことをほのめかしました。

それから時間が経って、一九七〇年の一一月、三島さんが亡くなられる三日前、僕は急に三島さんの声を聞きたくなって、深夜に電話しました。いろいろなことを話したのですが、写真集『新輯　薔薇刑』の装画のことになりました。この本は三島さんを写真家の細江英公さんが撮ったもので、僕が装丁を担当して装画を描きました。「これは俺の涅槃像だろう」と、三島さんから絶賛されました（その意味は三日後にわかるのですが）。その絵は、体に薔薇が刺さっ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

たオダリスク風のポーズで横たわっている三島さんを、ヒンドゥーの神々が天界に救い上げていくというものです。

そして、「君はインドへ行ってもいいようだ。インドで生を学んできなさい」と言われました。結局、これが三島さんからの僕への最後のメッセージとなりました。

この「インドへ行ってもいいようだ」という言葉ですが、行けるような精神状態になったという意味にとれるけれど、もしかするとその反対だったかもしれない。インドを体験して、これからの自分の生き方や芸術に生かしなさいというサジェスチョンだったかもしれません。

実際にインドに行くと、生と死は一体としてからみ合っているものだということを体で感じることができました。そもそも生と死は一体のものですが、日本ではそれが隠されていて、特に死は日常生活から切り離されている。そして普段はまったく信仰していないのに、人が死ぬと急に仏教徒になって、あの世のことを考えたりする。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

インドでは、老人が死にかけて横たわっているその隣で、おばさんが必死になって生きるための食べ物を売っている。このような光景に何度も出くわしました。生と死が渾然一体です。死んだり、死にかけているからといって、悲しんだり、悔やんだり、泣いたりする人はいない。

また、街を歩いていると物乞いがひっきりなしに手を差し出してくることにも驚かされました。枯れ木のような細く弱々しい手でシャツの端を掴まれた時には、冷たい霊気のようなものを感じました。貧困もあからさまで、これも日本ではなかなか見られないものでした。

その一方、ベナレスのガンジス川では感動的な夜明けに立ち会うことができました。これは僕にとって一種の聖なるものとの出会いで、僕は自然の一部であり、自然は僕の創造と進化を助けてくれるということを感じました。インドではどの場所でも、その自然の霊気によって僕を子どものような姿に変えてくれる、そんな気がします。

「インドで死を通して生を学ぶ」ことは、七回行ってもできていない気がする。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

けれども、インドは僕の生き方と芸術に大きな影響を与えてくれたのだから、ビートルズと三島さんに感謝しないといけないですね。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

インドでは生と死が渾然一体です。
三島さんからは「君はインドに行って、死を通して生を学んできなさい」と送り出されました。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

下痢をしてインドがわかる

インドでは、天国のような感動と地獄のような苦しみの両方を体験しました。

感動の例をあげれば、カシミールの中心地スリナガル（シュリナーガル）にあるナギン湖の夕暮れです。湖の対岸に位置するヒマラヤの山々の万年雪がピンク色に輝き、日没が近づくと青い影がせりあがってきて、徐々に山々の輝きを消していく。そしてあたり一面が青一色になると、今度は野生の鳥が一斉に鳴き出して、世界は生命に溢れているということを感じさせてくれるのです。

地獄のような経験といえば、ひどい下痢にかかったことでしょう。僕はインドに行くと必ず下痢になりますが、インドへ行った日本人はほとんどそうなるんじゃないかな。衛生状態が違うし、水が違うから仕方がない。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

お腹を壊すと苦しくて、力が出なくなる。でもそれを解脱(げだつ)と思えばいいんです。体が浄化されるのだから。

下痢になると、体から水分が排出され、何も食べられなくなるから、体がどんどん弱っていきます。それに伴って精神も弱っていく。けれども精神が弱ってくると、少しずつインドがわかってくる。

精神が健全な間は、日本から見ているインドですが、下痢はそれを強制的に壊してくれる。日本的なもの、文明的なものを体外に排出し、吐き出してくれるようなものです。そして空っぽになれば、必要なものが全部入ってくる。言ってみれば強制的に「死んだふり」にさせてくれるわけです。

一九七八年にミュージシャンの細野晴臣さん、写真家の大石芳野(よしの)さん、ライターの太田克彦さんたち六人と一緒に南インドを旅しました。僕以外の六人はインドが初めてなので、「インドに下痢は付き物です。でも二、三日で治ります」と説明していました。その前の一回のインド旅行では、下痢になったけれ

ど、断食をすれば二日程度で回復していましたから。

五日目くらいからメンバーに症状が現れて、細野さんが一番重症でした。八日目に僕がマドラス（チェンナイ）でお腹を壊しました。四〇度近い猛暑の中、ホテルでテニスをしたら、熱中症で高熱にうなされ、同時に下痢が始まりました。このホテルでの四日間は下痢が激しくて、部屋から一歩も出ずに寝ていました。細野さんも同じ状態で、二人はそれぞれの部屋でひたすら横たわっていた。固形物を医師に禁止されていたので、食べるものはランチとディナーに出てくるスープだけ。

僕は一晩中、便器を抱えている状態でした。細野さんはその前からだったので、もっとひどくて、スルメのように厚みのない体になってひっそりと寝ていた。細野さんは「ここで死んでもいいだろうなと思った」と、後で教えてくれました。

そんな時に皆でマドラスの日本総領事館を訪ねることになりました。そこで細野さんと僕の症状を話したら、総領事は「水を飲まなかったでしょうね。イ

ンドで肝炎にかかると治りません。死にます」と言うのです。それから、「明日自宅で日本料理を用意するから。とにかく来てくれ」と招待してくれました。久しぶりの見事な日本食で、僕と細野さんにはおかゆが用意されていました。こんなおいしい食事はインドで初めてです。それから二人は見る見る元気を取り戻し、無事に帰国できました。

このひどい下痢によって、僕は僕自身の地獄と対面できました。しかし病気の後は、常にインドに驚きインドに怯（おび）える自分ではなくなっていました。下痢によって「私」への執着を消すことができたのでしょう。このことは、インドならではの病気のご利益かもしれませんね。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

豊島横尾館は生と死の出会う場所

死をテーマにした僕の個人美術館があります。それは二〇一三年に建てられた「豊島横尾館」で、瀬戸内海の岡山県と香川県の中間に位置する豊島にあります。

これは、岡山に本社があるベネッセの会長（現・名誉顧問）の福武總一郎さんから「自分の葬館」＝弔いの館を作ってほしいと頼まれたものです。福武さんは、この地域の自然を大切にしつつ、地域を活性化したいという考えから、個人資産を寄付して直島や豊島に美術館を作り、瀬戸内国際芸術祭を企画しています。

福武さんは自分が操縦するヘリコプターに僕を乗せて、瀬戸内海を案内して

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

くれました（ちょっと怖かったけれど）。ヘリコプターから見ると、一つ一つの島が枯山水の庭の飛び石のようです。福武さんはそれを見ながら、ここに美術館を作ろう、あそこをこうしよう、などと計画を立てて、それを実現しています。スケールの大きい人です。

ベネッセという企業名は「よく生きる」という意味で、福武さんは「よく生きることはよく死ぬこと」とおっしゃった。その考えは僕と同じなので、話をしてすぐに葬館を作るということが決まりました。

豊島にある古民家を改造して美術館にしたのですが、建物から内部までをデザインするのは一九七〇年の大阪万博の「せんい館」以来です。

この時、アーノルト・ベックリンの『死の島』が浮かびました。ベックリンはスイス生まれの画家で、世紀末の象徴主義の画家と分類されるのかな。『死の島』は一八八〇年から八六年の間に五点描かれています。いずれも、白い棺を乗せた小舟が糸杉のある小さな島に向かって進み、舟には漕ぎ手と白いフードの人物が立っている、というものです。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

この絵を見たヨーロッパの人は、ギリシャ神話のカロンを連想したといわれています。カロンとはこの世と冥府を分ける川（日本でいうと三途(さんず)の川）の渡し守の老人で、死者を乗せて舟を漕ぎます。

すでにある古民家の倉、納屋、母屋、庭を展示空間にデザインして、新たにレンガの塔を建てました。展示されている絵画は福武さんが僕の全作品から選ばれたもので、やはり死に関連する作品が多かった。ベックリンへのオマージュとして、糸杉を植え、『死の島』『死の島 ベックリンに基づくII』と題した僕の作品、さらに豊島にあるただ一つのY字路とベックリンを結びつけた作品『メランコリア』（これはベックリンの遺作のタイトル）を展示しました。

横尾館を象徴する色は赤です。横尾館の入口にあたる倉には、『天ニアルモノヲ見ヨ』という赤一色の作品があります。さらに建物の壁が、この地方の様式である黒く焼いた杉板と赤いガラスで作られていて、内部から外を見ると、赤い世界になるのです。

「天ニアルモノヲ見ヨ」は、真っ赤な星空の下にピラミッドとスフィンクスとターザンが描かれています。僕はこのピラミッドがクフ王の墓なので、フク王＝福翁（福武さん）の墓というダジャレ的な連想をしました。それで庭にエジプトの砂漠を思わせる砂を敷き詰めました。その中に川（池）を置いて、これをナイル川としました。ナイル川は同時に三途の川でもあるのです。

全面が赤い絵を集中的に描いたのは、一九九六年から五年間くらいですね。なぜ赤い絵かというと、一つは、空襲で明石や神戸のある南の空が真っ赤になっているのを見たことです。西脇にはほとんどなかったのですが、明石、神戸はB29の大規模な空襲を受けました。爆弾の音が聞こえて、家のガラスがビリビリ震えることもあって、子ども心に忘れられない怖い出来事でした。南の空は、墨汁の中に赤い絵具を大量に流し込んだような、地獄の業火を思わせる何ともシュールな光景です。

その一方で僕は赤を宇宙と結びつけて考えていました。この地球は宇宙の一部にあるのですから、宇宙はわれわれの生命を生んでくれた源です。そして宇

宙は人間の真の故郷です。また星の一生がそうであるように、宇宙では常に輪廻転生が起こっています。だから、赤は死と再生の色なのです。

新設したレンガの塔は、僕が敬愛するジョルジュ・デ・キリコの形而上絵画の『イタリア広場』に描かれている塔と対応しています。ちなみにキリコはベックリンを私淑していました。塔というと、怪人二十面相やシャーロック・ホームズなどの探偵小説によく出てきます。怖いけれどワクワクする、そういう美術館にしたかったんです。

塔の内部には、僕がこれまでに集めた滝のポストカードを何千枚も貼り詰めました。天井と床が鏡になっているので、見る人は滝のポストカードの万華鏡に入り込む形になります。滝が無限に続いていて、底なしの井戸に落ちていくように感じられるかもしれません。

塔は男性器を、滝は精液を象徴しています。その滝の水はナイル川となって庭の池に流れていきます。庭には赤く塗った石を多数配置して、異世界を感じさせる空間としました。だから「死の島」は同時に「生の島」です。

CamScannerでスキャン

あとトイレもちょっとした工夫があります。江戸川乱歩の鏡のマジックをヒントにしたものです。入ったけれど用を足さずに出てきた人もいるらしいですよ。お楽しみに。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

空襲で明石や神戸の南の空が
真っ赤になっているのを見ました。
一方で僕は赤を宇宙と結びつけて
考えていました。
だから、赤は死と再生の色なのです。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「死んだふり」はどこにでもある

宮竹先生の『「死んだふり」で生きのびる』という本は昆虫についての話ですが、これを人間の生き方や哲学に応用すれば、面白いことになる気がします。たとえば僕は宣言が好きで、何回かやっているけれど、それは死んだふりにつながることだとも考えられます。

さっき話した一九六七年の死亡通知・死亡広告は死亡宣言だし、一九七〇年に休業宣言、一九八〇、八一年に画家宣言、二〇〇七年に隠居宣言をしています。宣言は未来を引き寄せて、現在と同化させることじゃないかと思う。死亡宣言ならば、私はもう死んでいますと過去完了形で言ってしまう。死は必ずやってくるけれど、ここですでに死んだと、外に向かって伝えるわけです。他

CamScannerでスキャン

の宣言も同じで、もう作家です、もう画家です、もう隠居ですと、これからやろうとすることをすでに起こったことにしてしまいました。

そうすると気分がすごく楽になるから、宣言は一つの自由の求め方だと思います。だいたい僕が宣言する時は先が見えなくなっていて、このままでは駄目だという状態でした。立ち止まって一息入れるという面もありますが、僕の場合はもう少し切実だった気がする。だから死んだふりをしてみたわけです。

死んだふりには、遊びというか、ある程度の不真面目さが必要です。さっきの死亡通知だって、「老衰のために三十歳の天寿を全うし」とシャレとわかるように書いているんですから。

「睡眠は死んだふりか」という質問ですね。意識から解放されるから一種の死んだふりなんでしょうね。「死んだように眠る」とか「永眠」という言葉もあるから、多くの人が眠りを死と近いものと考えていることは間違いありません。けれども、心臓や肺など各器官は動いているし、揺さぶれば起きるのだから、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

死とは違います。それに夢を見るから、起きている時よりも働いている部分もあるわけです。

夢の理論では、フロイトの精神分析が有名ですが、人智学の創始者のルドルフ・シュタイナーの考えに僕は近いものを感じます。興味のある方はシュタイナーの本を読んでみてください。

僕は一九七〇年頃から現在まで、夢日記を書いています。その中には死と結びついた夢もあります。その一つはこんな内容でした。

僕が斬首の刑に処せられるのです。二人の侍に連れ出されて、僕の首は切り落とされる。首筋に焼けるような痛みが走り、首が胴体からきれいに切り離されて地面に落ちる。僕は深い井戸のような穴に吸い込まれていきます。突然風景が変わって、首のない胴体だけの僕は死んだ母に腕を取られて、家に向かって歩いていく。それから胴体だけの僕は母と小学校へ向かう。最後は、僕が高校で英語の授業を受けていて、この時は頭と胴がつながっていて、しかも髪の毛は金髪で七三分けにしているのです。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いつもこうした死に関連した夢を見るわけではありませんが、夢の中では生と死の垣根を越えて、生者も死者も同じように存在しています。

夢には、自分さえ知らない自分が登場します。そして夢が僕を導いてくれると思っています。だから夢は非常に重要です。

睡眠や夢のことも含めると、死んだふりはどこにでもあると思うんです。たとえばサボリも広い意味では「死んだふり」かもしれない。学校に行くのが嫌で、頭が痛いなどと仮病を使って休んだことは、皆、やったことがあるんじゃないですか。

政治家だって、あれこれ追及されると「記憶にございません」とか言って、批判が収まるのをじっと待っている。これも死んだふりの一種といえるでしょう。

「死んだふり解散」というのがあるんですか？　中曽根首相が解散は無理だと周りに思わせておいて、一九八六年六月に突然衆議院を解散したことをそう呼

CamScannerでスキャン

るんですね。

ぶんですか。政治家は死んだふりをしていても、裏ではあれこれ動き回ってい

ひょっとすると、鉱物など無生物も死んだふりをするかもしれない。たとえば電気製品は時々調子が悪くなることがあるじゃないですか。コンセントを抜き差しすると直ることもあるけど、機械が仕事したくないのかもしれない。

地球だって死んだふりをするかもしれません。ガイア理論に立てば、地球は大きな生命体だから、そういうことも可能性として考えられるでしょう。このところ世界で頻発する異常気象は、反省しなさいという地球からのメッセージかもしれません。

まあ大きな話はともかく、一人一人が生きていくうえで、「時々、死んだふり」は意味のあることだと思いますよ。

第3章 面倒くさいで救われる

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「面倒くさいことはやらない」主義

僕は「面倒くさい」という言い方を日常的によく使います。難しい局面、ちょっとややこしいな、と思った時には、いじくりまわさず、そのままほっちらかしておく。僕はそうして生きてきたように思います。

面倒くさいことはやらない、その結果困ったことになっても、「しゃーない」と受け入れて、そのうちなんとかなるだろうと楽天的に考える。そういうラテン的な考え方は関西人に多いのかもしれない。

物事に白黒つけて、論理的に考えていくことは社会生活をする上では必要なのでしょう。けれども突き詰めて突き詰めて論理的に解明しようとすると、そのことにとらわれて悩みがどんどん膨らんでいくこともあります。また、そも

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

そも自分ごときには処理しきれない事柄かもしれない。
それならば、「面倒なことをしない」という無責任さで対応したほうがいいんじゃないですか。無責任な、と誰かが顔をしかめてもかまわない。この無責任さを貫くのにも、なかなか責任が伴うので大変です。

仕事のことで、手間や時間がかかって面倒だなということはそれとは違います。僕は仕事を引き受ける時に、受けたほうが得か損かという計算はしません。好きか嫌いか、それだけです。

仕事では、なるべく人のやっていないことをやろうと考えるので、それなりに手間と時間がかかることもあります。けれども、自分の思っていることを実現するための作業だから、大したことではない。

仮に長い日にちのかかる作業でも、先のことは考えず、その日やるべき仕事をやっていれば、いつかは形になります。面倒な仕事でも、自分の人生を左右する問題ではないから、気が楽なのです。

それともつながるけれど、僕は主体性がないというか、優柔不断です。それがはっきりと表れたのは高校を卒業する時のことです。

高校生になると、将来自分は何になるのかという選択を求められます。こういう人になりたいとか、どの仕事に就きたいとか、偉くなりたいとか、お金持ちになりたいとか、いろんな願望を持ちます。僕は高校を出たら郵便局員になるということしか考えていなかった。だから高校では就職コースに入っていました。

ところが兵庫県の絵画コンクールで入賞したりして、もったいないから美術大学に行ったほうがいいと先生たちが言い出しました。先生たちが、僕の親を説得したのです。

それで急に進学コースに移って勉強することになった。勉強は嫌いなのに、家庭教師を三人もつけて猛特訓。三人ですよ！

それで武蔵野美術大学を受験するために東京にやってきました。その時は西

CamScannerでスキャン

脇の高校で美術を教えていた先生が東京に戻っていたので、先生の下宿に泊まっていました。

そうしたら美大の試験の前の晩に、その先生から「試験は受けずに西脇に帰りなさい」と言われました。僕は「せっかく受験の準備をしたのに」などとは言わず、「はい、そうですか」とそのままあっさり西脇に帰ってきました。先生にその理由を問いただしたり、先生に逆らって試験を受けることもしなかった。

西脇に戻ると、高校の担任の先生があちこち電話をかけて、結局、加古川の印刷所に就職口があるのでそこに行けという。僕は言われたままに、どんな会社か、そこで何をやるのか、よく知らないままに印刷所に行く。印刷所は半年でクビになるのですが、ただ人に言われるままに動いて、本当に優柔不断です。

クビになった経緯を簡単に言うと、刷り上がった印刷物を載せた僕の自転車が無人踏切で倒れて、線路の上に散らばってしまった。間の悪いことに突然の雷雨で印刷物が全部ズブ濡れ。おしゃかです。会社に戻ったら、「明日から君

の机はない」と会社の偉い人に言われた。そういうことです。

実は昨年（二〇二二年）三月、その美術の先生から手紙があったのです。「なぜ試験前夜に帰れと言ったのでしょうか」という質問の手紙を出したところ、それについての返事がありました。

この先生は太平洋画会という美術団体に所属していて、その絵は僕が初めて見た芸術っぽい絵でした。長髪で、コール天の上着に黒いタートルネックのセーターを着て、スタイルも芸術家。僕は美術部に入り、先生から油絵を教えてもらいました。それまでの模写とは大きく異なる世界でしたが、先生が所属していた太平洋画会に出品して、入選しました。そして即会員に推薦されました。プロになったわけです。それで先生の母校の武蔵野美術大学を受験することになったのです。

僕に美大受験を勧めたのになぜ前の日に帰れといったのか、やはりその理由を知りたかった。手紙には、僕の両親（養父母）から「東京の大学に行かせな

いようにしてくれないか」と強く頼まれたと書いてありました。

僕の父は呉服商だったのですが、その時は仕事をやめていたし、家が裕福でもなかった。東京の美大に入学したら、学費と生活費で経済的に苦労するだろうということで、先生もずいぶん悩んで受験直前にそう決断したのだそうです。

僕にとっては最初の大きな人生の転換点、Y字路でしたが、六〇年以上たって、先生から答えがもらえたわけです。

親が僕を東京に行かせたくなかったのは、経済的理由だけでなく、養子の僕が自分たちから離れるのを恐れていたこともあった気がします。受験せずに家に帰ったら、両親は嬉しそうにしていました。母は「よう帰ってきたな。赤飯炊こうか、ぜんざいがええか」という調子です。

それはそれとして、人生の転換点に対して、自分の考えで行動するということがまるでなかった。優柔不断で受け身の態度です。

でも、その結果として、今の自分があるのだから、それがよかったのかもしれない。

「死んだふり」をしてやりすごしたといえるのかもしれません。カッコよく言えば運命に従ったということになるのかな。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「面倒なことをしない」という
無責任さで対応したほうがいいこともある。
無責任さを貫くのにも、
なかなか責任が伴うので大変です。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

結婚は相手任せ、職業は運任せ

面倒くさいことはしない、受け身の態度でいる、というのが僕の生き方です。

結婚も相手任せでした。

たしか交際相手の女性と知り合って一週間も経たないくらいでした。彼女がアパートを借りてくれて、一緒に住むようになったことが結婚の始まり。彼女というのはうちのカミさんなんですが。

僕は加古川の印刷所をクビになってから、雑誌や新聞にイラスト（当時はカットと呼んでいた）の投稿をしていましたが、その投稿が縁となって神戸新聞社の宣伝技術研究所に勤めることになりました。

仕事場は神戸新聞会館という、当時、神戸で最も大きなビル。その会館の事

務の仕事をしている女性が声をかけてくれて、おつきあいを始めました。そうしたら、一週間目に神戸市灘区の青谷(おおたに)に彼女が勝手にアパートを借りて、「アパートを借りたから、そこに行きましょう」と言う。僕は文無しの安月給サラリーマンだから、彼女が全部出したんでしょうね。僕は神戸に下宿していたから、そのほうが便利かなと一緒に暮らすことにしました。僕は二〇歳、彼女は二一歳でした。

つきあって一週間だから、お互いの性格や家族のことなど、まるでわからない。その女性は衝動的に行動するタイプなのでしょうが、僕も「ああ、そうですか」とついていってしまったのです。

その翌年に西脇の実家で簡素な結婚式をあげるのですが、人生の重大事である結婚を相手任せで決めてしまいました。主体性がないといえばそうだし、結婚について何も考えていないといえばそうでしょう。せいぜい年上の女性と結婚できればいいな、くらいのことしか考えていなかったから。とはいえ、カミさんとは今も一緒に暮らしているのだから、その選択は間違っていなかったと

CamScannerでスキャン

思います。

結婚式からしばらくして、「ふしぎなふえふき」というバレエ公演のポスターで日宣美（日本宣伝美術会）の奨励賞をもらい、プロとしての道が開けてきました。結婚してよかったわけですが、それで大人になったとか一人前になったという感覚はまったくなかったです。

美大を受験することになって猛勉強をしたこと、試験の直前に受験を中止したこと、印刷所に勤めたこと、神戸新聞社でデザインの仕事をやるようになったこと、そして結婚したこと。これらは、すべて自分でやりたいと思ったことではなくて、そういうふうにさせられてしまったことです。しかもそれが全部、現在につながっています。

だから、放っておけば、その人にとって必要なことをさせられるようになっていくのが運命だと思っていました。運命に身を任せればよいところに連れていってくれる、これが僕の実感です。

今、デザインの仕事をやりたいとは思っていなかったと言いましたが、不思議に思う人がいるかもしれないので、ちょっと説明します。

僕は高校を卒業したら、郵便局に勤めて休日に趣味の絵を描く、そんな生活を夢見ていました。ところが美大を受験することになって、その夢は破れました。その後は、新聞や雑誌など多くの連載小説の挿絵を手掛けた、岩田専太郎のような挿絵画家になろうと思い、通信教育の挿絵講座を受けたこともあります。

すぐに挿絵画家になれるはずもなく、雑誌などにカットを投稿して、お金を稼いでいました。その流れで『神戸新聞』の「読者のページ」にも投稿して、よく掲載されるようになりました。そして投稿仲間が集まって、神戸・元町の喫茶店で展覧会を開いたところ、たまたま神戸新聞社の人が見て、誘ってくれたのです。

最初はカット描きの仕事でしたが、そのうち、新聞社主催のイベントのポス

ターを作ってくれと言われて、デザインの分野に入っていきました。

僕はデザインの勉強をしたことがないし、デザイン理論も知りません。ただ見よう見まねでやっているうちに、それが面白くなってきて、デザイナーと呼ばれるようになりました。だからデザイナーになるなんて、まったく考えていなかったのです。

受け身の姿勢、優柔不断で生きてきた僕ですが、自分で道を決めた一番大きな出来事は画家に転向したことです。

一九八〇年にニューヨーク近代美術館（MoMA）で「ピカソ展」を見ていたら、何の前触れもなく、「画家になる」という言葉が閃（ひらめ）きました。僕の頭の中で誰かがそう言っているような、突き上げるような感覚です。抵抗できないくらい激しいものでした。

あの頃はヨーロッパで僕の個展が企画されるなど、デザイン路線に乗っていれば、世界のトップレベルで活動できる自信はありました。何より、デザイン

は僕の天性と思うくらい一体化していましたから。

そこに突然、「何言うとるんや、デザインなんかやめろ！　絵を描け！」という天啓の声というか衝動が湧き起こったのです。こんなことは初めてでした。悪魔か天使かわからないけれど、僕の中の第三者がそう命令します。その力はあまりに強く、それに逆らうことは考えられなかったのです。強制的洗脳です。

画家になって駄目だったら、またデザインに戻ればいいやという気持ちはゼロでした。周りの人は、そのうち嫌になってデザインに戻ってくるよと思っていたかもしれないけれど、僕は本気で絵ばかり描いていた。マスコミに「画家宣言」として取り上げられて、ますます戻ることはできなくなりました。

今思うと、あの時期は何か目に見えない力に操られていた感じです。抵抗するかしないかという選択ではなくて、有無を言わせない力でした。

イヴ・タンギーというフランス生まれのシュルレアリスムの画家がいます。彼は兵役から帰ってパリでバスに乗っていたら、窓から画廊のショーウインドーの絵が目に入った。すぐにバスを降りてその絵をじっくりと眺め、絵描き

しい。

になろうと決意したそうです。その絵はキリコの『子どもの脳』という作品ら

自分の運命を転換させるような衝動に直面する、そういうことは僕だけでな

く、多くの人にも起こっているのではないでしょうか。

このことは、自分の意志というより、内にある衝動に逆らわずに従った結果

とも考えられます。そうすると、画家に転向したことも運命に身を任せるとい

うことの延長線上にあるのかもしれません。

CamScannerでスキャン

運命に身を任せれば
よいところに連れていってくれる、
これが僕の実感です。

僕は人づきあいが苦手です

僕は人づきあいが苦手です。

人づきあいが苦手ということで悩んでいる人もいるかもしれません。友達は大事だとか人脈が広いと有利だとかよく言われるので、そこで悩むのもわかります。でもそんなに気にすることはないですよ。

僕は一人っ子で育ったから、人と話す機会が少なくて人見知りが激しかった。それで人の間に入っていけず、知らず知らずのうちに孤独を愛するようになっていました。子どもの頃、熱中していたのは絵を描くことと小鮒獲(こぶなと)りで、どちらも一人でやれることです。

でもそれは作品を作るうえでは、とてもよかった。絵を描くにはキャンバス

に一人で向き合わなければいけないけれど、僕は孤独であることに慣れていたわけです。

そもそも画家は孤独かもしれません。画家に転向してからそれがわかりました。デザイナー時代はクライアント（依頼者）との打ち合わせがあったし、仲間たちとの交流がありました。けれども画家になると同業者との交流はまったくありません。時々、ギャラリーの人や美術館の学芸員などが訪ねてくる程度で、キャンバスに向かって、終日、何をどう描いたらいいのか自問自答することになりました。

さらに高齢になると、だんだんと人と会うのが面倒くさくなってしまうものです。僕は難聴になってから、相手の話がよく聞こえなくなるし、自分の声が聞こえているのかどうかも不安になってくる。それでますます人に会うのが面倒くさくなっていきました。

コロナの影響もありましたが、自分の身体的なことや人づきあいが苦手とい

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

う性格から、人と会う機会がかなり減っていきました。でも別に特に困ることはなかったです。自分の中のもう一人と対話する時間が増えたのだから。

それに相手は相手で勝手にやっているから、そんなにこちらのことを気にしたりなんかしません。だから人づきあいがうまくいかないなどと、自分をそんなに追い込まないほうがいいと思います。

振り返れば、僕は自分を追い詰めたことがあまりないかもしれない。たとえば、数学ができないから猛勉強してそれを克服しよう、優柔不断の性格を直そう、などと考えたことはありません。たしかに物を作る時はよいものを追求するけれど、それは一つの冒険でもあるから、話は別です。

そのうちなんとかなるさのスタンスで行けば、困ったことがあっても、たいていは落ち着くところに落ち着くものです。

僕は人づきあいが苦手ですが、仕事柄いろいろな人と会って、対談したりコラボレーションしたりしてきました。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

でも、人と会うといつも緊張してしまうので、本当はなるべく人と関わりたくない性格だと思います。外の誰かと話をするのではなくて、内側にいるもう一人の自分と話をするのが好きなのです。やっぱり孤独は楽しい。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

なんとかなるさのスタンスで行けば、
困ったことがあっても、
たいていは落ち着くところに
落ち着くものです。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

創作には「いい加減」が必要

子どもは遊びに熱中すると、他のことを何も考えなくなって無心で遊んでいる。僕はそういう状態で絵を描きたいと思っています。

子どもは自分で物語を作って、そしてその物語の主人公になって遊んでいる。一方、大人になるということは、自分の中の物語性というかフィクションを排除していくことに等しい。自分で作った物語の代わりに社会を持ち込んだり、いろいろな約束事を入れたり、評価を意識したり、つまり外部を自分の中に取り入れるようになる。

だけど、実は子どもが持っている物語やフィクションが創作には必要だと思います。社会の流行や好み、社会の問題など外部を意識すると作品はどんどん

平均化していって、結果として同じようなものが並ぶことになります。自分だけの物語を持っていないと、本当に創造性のある作品を作ることができないのです。

三島由紀夫さんは「荒唐無稽」というエッセイ（『映画の友』一九五四年七月号）で、「芸術の母胎というものは、インファンティリズムにちがいない、と私は信じているのである」として、「地底の怪奇な王国、そこに祭られている魔神の儀式、不死の女王、宝石を秘めた洞窟、そういうものがいつまでたっても私は好きである」と書いています。

南洋一郎の『バルーバの冒険』と江戸川乱歩の『怪人二十面相』を愛読していた僕は、このエッセイを読んで本当に嬉しかった。芸術にはインファンティリズム（幼児性、子ども性）が必要なんだと自信を持つことができました。

とはいえ、僕もそうでしたが、現実に絵を描く時には、目的が何かを意識することになります。周囲の評価、美術の流れと現在の傾向、ギャラリーの意向

CamScannerでスキャン

など、さまざまなことが頭に浮かんできます。絵を描くことがかえって悩みの種になってくるという悲しいことになります。

結局、いいものを作らなければいけないとか、評価されないといけないとか、頭に浮かんでくるそういった意識を捨てないと先に進めないと思うようになりました。そのことはグラフィック・デザイナーの頃から感じていたようです。

それを最初に知ったのは、一九六九年の「第六回パリ青年ビエンナーレ」に『責場』を出品した時でした。日本側のコミッショナーである美術評論家の東野芳明さんが電話をかけてきて、「横尾君、版画作ってくれないか？」と言う。ポスターしかやったことのない僕は、「版画なんか作ったことないから自信ないです」と断ったら、「ポスターを作ってる感覚でやればいいじゃないか」と、かなりいい加減な返事をくれました。いい加減でいいのならと、引き受けました。あれこれ理由をあげて断るのも面倒だったし。

その一方で東野さんは、「ここしばらく日本は賞から遠ざかっている。君が

やることで賞を取ってもらいたい」とプレッシャーをかけてくる。僕は版画をやったことはないし、現代美術の世界に積極的に関わったこともない。しかもパリ青年ビエンナーレのことやこれまでの傾向も知らないので、どうしていいかまるでわからない。

それで、何でもいいからやればいいんでしょうという気分で、シルクスクリーン三点組の『責場』を出しました。ポスターから文字を抜けば版画になるだろうと、大して考えもせずやってみたのです。そうしたら版画部門のグランプリを受賞してしまった。これで、「いい加減」は本当に便利のよいものだと悟りました。

あれこれ迷った時に、あるいは余計な意識が出てきた時に、それらを「いい加減」という言葉で投げ捨てることができます。

ちなみに『責場』という作品は、和装の女性が縛られて折檻されている、浮世絵風の絵です。そして版画のプロセスを表現したもので、いくつもの色で刷られているけれど完成版はなくて、完成版は見た人が想像してほしいという意

図。未完の完成作品です。
　これは僕が一時期印刷所に勤めていて、分色の校正刷りや失敗した印刷用紙（ヤレ）を見て、思いもかけぬ図柄が浮き出てきたことをヒントにしています。なお「分色」とは、4色印刷ではスミ、アカ、キ、アオの4版を重ねて刷って色を出しますが、一つの色の版だけで刷ったもののことです。
　そうすると、すぐクビになったけれど、印刷所にいたことも無駄ではなかったのかな。

『責場』と同時期に、大阪万博で「せんい館」をデザインしました。どういうわけか、建築には素人の僕に建物を含めたパビリオン全体のデザインの依頼が入ったのです。このせんい館も未完を意識したものです。
　建設工事中の現場に行ったら、パビリオンの巨大ドームに足場が組まれていて、そこで大勢の作業員が働いている。それを見たら、この作業現場をこのまま凍結することが必要だと直感してしまった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

足場をそのまま残したいと提案したら、当然、プロデューサー以下、せんい館の組織委員会は全員反対しました。「じゃあ、せんい館の最高責任者の人に会って説得したい」と食い下がりました。

責任者は日本繊維産業連盟会長の谷口豊三郎氏。東洋紡績の社長、会長を歴任した人で、その頃は日米繊維交渉で超多忙でした。一〇分だけということで時間をもらって、コンセプトを話しました。

「建築は完成した時から破壊、崩壊へと進んでいく。だから建築の本来の姿はプロセスにあり、その一瞬を示したい」と、僕にしては珍しく、まくし立てたのです。谷口氏は「あなたの言っていることはよくわからないけれど、あなたのせんい館に対する情熱はわかりました。思い通りにやってください」と認めてくれました。

せんい館の赤くて丸いドームに足場を残して、そこに作業員とカラスの人形を置きました。まだできあがっていない建物のようであり、同時に取り壊している最中のようにも見えます。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

近未来的なパビリオンが建ち並ぶ中にあるのですから、見た人は驚いたり、あきれたり。批判もたくさん来て、総スカン状態。でも僕は「人類の進歩と調和」という大阪万博のスローガンをそのまま認めることはできなかった。そのスローガンを裏切るために、未完をぶつけたのです。

完成しないほうがいいといっているわけですから、外から見たら「いい加減なやつだ」と思うでしょう。でも長い目で見れば、その「いい加減」や「未完」が役に立ったのです。

子どもは遊びに熱中すると、
他のことを何も考えなくなって無心になる。
僕はそういう状態で
絵を描きたいと思っています。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

頭を空っぽにするために

考えれば何かいいアイデアが出てくるかというと、必ずしもそうでもありません。長いこと考えると、かえって混乱して前に進めなくなるということもあるはずです。

特に創作には、「いい加減」と同時に「頭を空っぽ」にすることが必要です。

僕は公開制作をよくやっていますが、これも頭を空っぽにするという効果があるからです。

一九八四年のラフォーレミュージアム原宿が公開制作の最初で、その年のうちに富山県立美術館、倉敷アイビースクエア、スタジオ200（池袋・西武）の四ヵ所でやりました。これまでに約二〇の美術館で、合わせて三〇回くらい

CamScannerでスキャン

やっているらしい。全部で八〇点くらい描いたのかな。
一日で終わる時もあるし、二日にわたる時もある。一週間おきに何回か同じ美術館に足を運ぶような長期的な作業になったこともあります。
近年はワークショップといって、参加者とアーティストが一緒に作品を作ることが美術館でよく行われます。僕の場合は一人でお客さんの前で絵を描くだけですが、これほど公開制作をやっている画家はあまりいないかもしれない。

なぜ公開制作を始めたのかというと、その頃は絵を描くためのアトリエがなかったことが原因です。アトリエを借りるとそれなりの費用がかかり、毎日のこととなるとばか高くなる。絵を描くための場所を提供してほしいと美術館に話をしたら、公開制作ならば場所を貸しましょうということになったのです。
一回やってみたら公開制作が面白くなってきて、一九八六年に自分のアトリエができてからも続けました。ちなみにアトリエは磯崎新さんの設計で、自宅から自転車で五分くらいのところにあります。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

観客の前で絵を描くのですが、後ろから背中越しに、お客さんの想念が矢のように突き刺さってくる。何をするのか、どんな描き方をするのか、どんな絵になるのか、と興味津々の想いが伝わってくる。物音一つ立てずに、文字通り固唾を呑んで、成り行きを見守っていて、僕よりも緊張している感じです。

すると、そんな熱心な人たちの前で、腕を組んでうーんと考え込んだり、悩んだりする姿は見せられないと思うようになるのです。さすがにお昼ご飯は食べるけれど、休憩は取らずに、ただただ手を動かす。僕自身はどんどん肉体的になっていって、どんどんどんどん絵が描けていく。

やる前は、人から見られると緊張して絵が描けなくなるんじゃないかと思っていたけれど、とんでもない。みんなに見られているこの状態から早く逃れたいという気持ちが強くて、うまく描こうとか、高評価を得られるようにしたいという思いは消えていく。頭が空っぽになるのです。もう人間じゃなくて野獣になっていくような気分です。

地方の美術館で個展をする時には、よく公開制作をやります。Y字路シリー

ズを続けていた時期は、その土地のY字路の写真を撮っておいて、キャンバスに描きました。「ご当地Y字路」です。その土地、その場所の力を受け取っているようでなかなかよかった。

お客さんにとっては、これまでに画家が絵を描く瞬間を見たことがないから、僕の行為が何かスリリングに見えているのかもしれない。事件の現場に立ち会っているような感じなのでしょうか。僕は一時期、コスプレをして公開制作をやりました。道路工事の作業員の格好をしてカラーコーンを置いたり、鳶職人さんの格好をしたりしたこともありますが、公開制作というお芝居をしたかったのかもしれない。僕は画家という役割を演じることで、自我を消すことができたのでしょう。

だからアトリエで描いた絵と公開制作のそれはかなり違います。公開制作の絵のほうがうんと自由な表現になっています。アトリエでは、雑念を消したいと思っていてもあれこれ考えてしまい、自由になり切れていないのです。

公開制作で、やけくそというか無茶苦茶な絵ができることもあるけれど、そ

れがきっかけで作品の傾向が変わることもありました。公開制作は僕にとっては貴重な時間です。自分の意図するところと違うところで、絵ができていってしまうのですから。

二〇一九年に横尾忠則現代美術館の「大公開制作劇場」展と「自我自損」展でやってからはお休みしているので、体が許すならどこかで公開制作をやってみたいものです。

絵を描く時に頭を空っぽにするといっても、アトリエで坐禅を組んだり、黙想したりといった特別なことは何もしません。絵筆を持って絵具を絞り出せば、頭を空っぽにしようというスイッチが入ってきます。まず画面に点とか線とか入れてみて、そこから何かが生まれればそれでいい。

目的とか、評価とか、計算とか、そういうものを捨てれば、絵を描くことが楽しくなります。生きていくことを楽しむ上でも、この法則は役に立つのではないのでしょうか。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

目的とか、評価とか、計算とか、
そういうものを捨てれば、
絵を描くことが楽しくなります。

CamScannerでスキャン

運命に従うか、逆らうか

人は、生まれて死ぬという運命、宿命から逃れることはできません。ここで運命について考えてみましょう。

僕は輪廻転生を信じていて、生まれる前の人生＝前世があると思っています。何百回か何千回かわからないけれど、積み重なった前世の上に、現在の生、現世があるわけです。そして前世の行い（おこない）の結果が現在の生となり、次に生まれる時は、今生きている結果が反映される。このように、連綿と続く過去生（かこしょう）の結果が自分です。

生まれ落ちた時に過去生の記憶は消されるので、前世での自分が誰か、どこにいて何をしたのか、男か女かなどは明らかにされません。けれども、その過

去生はその人の魂の中に全部入り込んでいます。

その過去生に基づく運命が、その人が右に行くか、左に行くかを決めています。人間には自由意志が与えられているので、運命に従うか、逆らうかはその人次第です。僕は、生まれた時に与えられた運命に従えばいいと思っています。それはすごく楽に生きられることだから。

「自分の運命は自分で切り開く」という言い方があります。自分の運命を操作して、やりたいようにやるのだという考え方で、現代はそれを選ぶ人が多いかもしれない。

けれども、僕には運命を操作する能力がなかったと思う。子どもの頃から、「できません」「お任せします」でしたから。

この性格や生き方は、僕が養子になったということによっています。戸籍では、三歳のときに横尾家にもらわれています。

赤ん坊の僕は未熟児で、実母も体が弱かった。実父の兄の嫁（養母）は大阪の日赤病院での勤務経験があって、そちらで育てたほうが安心できるというこ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

とになったようです。横尾家には子どもがいなかったので、家の存続という意図もあったのでしょう。いくつかの条件が重なって養子になったわけです。

養父母は僕を大事にしてくれて、甘やかしたともいえるけれど、とにかく自由奔放に育ててくれた。叱られたことは一度もなくて、僕のやりたいようにやらせてくれた。

とはいっても、僕はおもちゃを買ってくれとか、いい服を着たいとかを望むことはなかった。絵を描くことが好きだったので、紙と鉛筆やクレヨンを与えておけば十分。だから扱いやすい子どもだったと思います。

子どもの頃に描いた絵は、講談社の絵本の模写です。五歳で描いた「武蔵と小次郎の巌流島の決闘」の模写は今も残っていますが、その後の作品でよく宮本武蔵を登場させています。模写好きはずっと続いて、中学では映画スターの肖像画を描いていました。

中学、高校になって親に金をせびるということもなかったし、ぐれて不良になるということもなかった。学校の成績は数学や物理が駄目で、通知簿には１

から5まで全部ありました。でも高校を出たら働くつもりだったので、特に問題はなかったのです。

生まれてから二〇歳になるまでに、その人の人格が形成されるといいます。僕の場合は一人っ子で甘やかされて育っていて、面倒くさいことはすべて親がやってくれていた。だから子ども性を捨てることがないままに、成長しました。サラリーマンになった時、「おまえ、いつまで子ども、やってるんや」と言われたこともありますし。

この性格には、親が僕をいつまでも子どものままにしておきたかったということも影響しています。養子だから、いつ実の親の元に戻ると言い出すのか、それを恐れていたと思う。いつまでも家から出ていかないように、自立させないで手元で保護してきたのでしょう。

自分が養子だと知ったのは、高校時代です。西脇市の戸籍課でアルバイトをして、その時に自分の戸籍を覗いてみたら、そう書いてあった。だけどそれだけです。親に何も言わなかった。何か言うと、面倒くさいことになりそうだと

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

感じたから。

一人っ子だし、近所に相談する人もいなかったので、誰にも話すことをせず、自分の胸に収めていました。だから両親は死ぬまで、僕が養子のことを知らないと思っていたのではないかと思います。親に何も言わなかったのは、人間ができているとか、達観しているとかいうことではなくて、ただ面倒くさかっただけです。

でもそこで作られた性格、たとえば子ども性が創造の源泉として、今も役立っているわけで、養子という運命が僕の芸術家人生を作ってくれました。

僕は、生まれた時に与えられた運命に
従えばいいと思っています。
それはすごく楽に生きられることだから。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

自分は自分

以前、美術大学の大学院で教えていたことがあります。その時、学生たちは自分のことをすごく限定しているというか、計算している感じで、ちょっと驚きました。自分の人生がこれからどうなるかという想定をして、そのための計画を立てて行動しようとする。もちろん、それは必要なことではあります。

「どうしてそんなに自分の先のことを考えるのか」と聞いたら、「未来を想定しないと不安だから」との答えでした。

これから先がどうなるか、そんなことを想定してもあまり役に立たないと思うのです。大地震や大規模な感染症が発生するかもしれないし、もしかしたら戦争が起こる可能性もある。個人のレベルでも、交通事故に遭ったり、病気に

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

かかったりすることがある。
また、「アーティストとしてグローバルに活躍するためにどうしたらいいか、その方法を教えてほしい」と聞かれたこともあります。そんな方法はない、周りを気にせず、もっと自分が表現したいことを表に出すことが大事だというようなことを答えたと思います。
学生たちは、目的とか結果とか願望とか野心とかにがんじがらめになっている。その考え方にこだわらないように、違う考え方があることを伝えようとしたけれど、理解されたのかどうかわかりません。他の先生とは逆のことを教えているのですから。
学生たちはこれまで受けてきた教育の中で、目的、目標を立ててそこに向かって行動するというスタイルでずっとやってきたわけです。目的を達成するために努力して、相手より少しでも上に行きたいと競争してきた。だから自分に向き合いなさい、結果を考えずに表現しなさい、といってもよくわからな

CamScannerでスキャン

かったかもしれない。

目的や野心のために皆がしのぎを削っているというのを体感したのは、日本デザインセンターに入社した時です。周囲はみんな野望の塊でした。デザイナーでやっていくためには有名になるのが近道なので、成果を上げたい、デザインや宣伝関係の賞を取りたいと一生懸命になっている。デザイン理論を勉強したり、欧米の新しいデザインを参考にしたり、最先端の流行を取り入れたり、それぞれ必死です。

僕には、みんなが自分の範囲を超えたものを求めているように見えました。「そんなにしのぎを削ってどうするの」と思ってしまうのです。僕はそういう競争の中に入っていくには、明らかに足りない部分がありました。事実、四年で日本デザインセンターを退社してしまった。

だけど、結果としては専門教育など受けていない僕のデザインをいいと言ってくれる人が現れたわけで（最初に僕を評価してくれたのは、デザイン畑の人

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ではなくて他ジャンルの人たちでした)、人生はわからないものです。しのぎを削らなかったのがよかったということなのでしょうか。

僕はポスターを作る時に、何か社会にアピールしようとか流行を取り入れようとは考えずに、個人的に受け取ったイメージや個人的なメッセージを表そうとしていました。そしてそのことは、デザインを遊びにできるというメリットもありました。

絵を描く場合にも、自分が持っている目的や願望や野心は影響します。悪魔の誘惑はものすごい。「いいものを作れ」「評価されるようになれ」「有名になれ」と、常に悪魔の言葉が飛んできます。

それを意識すると、評価されるにはどうしたらよいのかと絵の制作に迷いが生じてきます。さらに誰かより上に行きたいという競争心も加わって、頑張りすぎる結果になります。それらは全部、僕にとってマイナスです。肉体的に消耗して不健康になるし、自分が自由になるために画家になったのにどんどん不

CamScannerでスキャン

自由になって、ストレスが増えていきます。
だから、周りからの評価を捨てないとうまくいかないということを、長年のうちに学びました。周りのことを考えなくなると、とにかく楽です。美術評論家や学芸員など、美術関係者からはよい反応が来ないかもしれませんが、それを気にしていたら自分が苦しくなってしまうのです。

そりゃ、成功しないより成功したほうがいいに決まっていますが、そこへの道は一つではないと思う。大方は、人気のある人や権威のある人といった他人と自分を同一化することが成功への近道と思ってしまう。しかし、結局は自分にしかできないものを作るところに落ち着くはずです。

制作を楽しむためには、遊びの要素を入れたり、自力でやろうとせず他力本願でやろうとしたりすることも有効でした。自分の願望や野心を捨てて、無心で絵を描く、これが一番だと思います。が、これも度重なる挫折の結果、到達した世界ではないでしょうか。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もう一つは自分自身を認めることです。僕は子どもの頃から、物事を論理的に順序だてて考えることが苦手でした。なぜ苦手かというと、そういうことが、知らず知らず、僕の計りしれないところでブロックされていたからではないかと思います。

たとえば、育った家には僕が模写する絵本の他にはほとんど本がなかったし、僕が一〇代になって読んだ本も江戸川乱歩と南洋一郎だけでした。少年物の探偵小説と冒険小説です。世でいう知性や教養とはほど遠いところで育ったわけです。両親自身が尋常小学校出身の無学の徒だったので、むしろ勉強ができないことにはワーワー言わなかったですね。

けれども、勉強ができないことや論理的な思考ができないということを自分の個性として生かせばいいじゃないか、ということに気づいたら、ずいぶんと楽になりました。とても簡単なことでした。自分は自分です。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「いいものを作れ」
「評価されるようになれ」
「有名になれ」と、
常に悪魔の言葉が飛んできます。
それらは全部、
僕にとってマイナスです。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

第4章 新しい作品、新しい生き方

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

この年で手に入れた新たな画面

よく「老化だ」「年のせいだ」と言いますが、心身の衰えを人はどのように自覚するのでしょうか。

昨年（二〇二二年）の急性心筋梗塞は高齢による血管の老化から来たものですが、僕が衰えをはっきりと自覚したのは二〇一五年に突発性難聴になった時でした。最初は耳鳴りがあって、そこから難聴に進みました。国内外のさまざまな補聴器を試しましたが、周りの音を拾ってしまってなかなかうまく聞こえない。試行錯誤の数年でした。

何年もかかって、一巡り返して「フィャンスシステム」というのですが、テレビと同 [illegible] 無線で直接左耳に出音できる機器になっています

らうなど、いろいろなコミュニケーションの形を試しています。

なくなる。無線機を補うために、ホワイトボードを使って質問内容を書いても

助かっています。ただし一人の声しか聞こえないので、相手が複数だとわから

した。これだと相手の言うことが完璧ではないけれど、少しは聞き取れるので

難聴になると、一字一字の音声に輪郭ができたような、音の形がぼんやりした感じになります。たとえば「あ」が「うわー」になって、「う」が「ふ」になる。しかもその音が全部つながってしまい、文章になると意味がわからず、ただうるさいだけ。相手の声が聞こえないと、自分の声も届いていないのではないかと不安になり、ますます会話ができなくなりました。

週刊誌の記事に、難聴は認知症にもっとも近い病気の一つだと書いてあって、それは僕にも理解できました。外から入ってくる言葉が消えたような状態になると、それに対応して自分の頭の中の言葉もだんだんと消えていくような感覚に陥ります。

耳が悪くなると、相手の声だけでなく自分の声も聞き取りにくくなって、自分の話している言葉が自分で理解できなくなる。自分の声が空気に吸収されていくような、不思議な感覚です。人間は頭の中で言葉を使って思考を組み立てているから、言葉が消えてしまうと物事を考えることも難しくなるのかもしれません。

難聴が進むと、人と接することが面倒になってくる。その代わりに絵を描く時間が増えました。人と会ったり、頭を使ったり、本を読んだり、音楽を聴いたり、テレビを見たりすることが難しくなる中で、唯一、絵を描くことが僕の「救済」になりました。

五感はつながっているので、耳が駄目になると他の感覚も衰えていきます。これは難聴になって初めてわかったことです。白内障になって視力が低下したり、喘息がひどくなったり、アレルギー性鼻炎になったり、歩いていてもすぐに息切れしたり。難聴が始まってから二年くらいで、腱鞘炎で右手が痛むよう

になりました。しばらくすると指の変形などで絵を描くことが難しくなりました。

絵を描くことで救われていた僕にとっては大きなショックでした。それからしばらく時間はかかりましたが、あれこれ試してみて、結局、絵筆を握りしめて、描くというよりもキャンバスに叩きつけるようにして描く方法にたどりつきました。前のような細かな筆遣いができなくて、荒々しい描き方になっていきます。

描いたものは、輪郭が曖昧になってぼやけているので、「朦朧画（もうろうが）」と名づけてみたりしました。これは日本画家の横山大観が西洋絵画の影響を受けて始めた「朦朧体」をもじったものです。

大観の場合は輪郭線を使わないで日本画を描くというコンセプトで、岡倉天心が目指した絵画の革新の流れにあるものでしょう。その考えや論理に基づいていて、いってみれば計算されて作られた画風だと思います。

僕の場合は耳が朦朧、目が朦朧、頭が朦朧の「トリプル朦朧画」です。論理

ではなく、自分の肉体の生理から突発的に起こったものだから、大観に比べて強いですよ。論理や理屈で生まれたものはそれを変えることができるけれど、僕はこの描き方を止めるわけにはいかないから。

突発性難聴から生まれたから、「難聴画」が正しいのかもしれませんが、〇〇画といった名前をつけるようになると、コンセプトになってそれに縛られてしまうから、「朦朧画」「難聴画」は冗談として受け取ってください。

画風の変化も含め、僕は変わったということをポジティブに考えています。たとえば線をぐにゃぐにゃにしか描くことができませんが、これは若い頃にはなかったことです。この年になって、新しい画風を手に入れることができたと考えれば、大いに喜ぶべきことでしょう。

もう一つの変化は、前よりも早く描けるようになったことです。言葉が消えていったこと、細かな筆遣いができなくなったことで、肉体に従うアスリートのように、どんどんと作品ができるようになりました。思考が優勢だとさまざ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

まな迷いが生じますが、それがなくなったのです。体が脳を代行してくれているる感じで、これはけがの功名でした。

こうなるまでは、僕は絵を描く時にがんがん音楽をかけていました。それは音によって、頭を空っぽにしようとしていたからです。難聴で音楽が聞こえなくなって、この方法が使えないので、どうしようかとしばらく悩みました。けれども、言葉が消え、考えることが減ったことに加え、腱鞘炎で体を使って描くことになった結果、頭を空っぽにして絵を描くことが自然にできるようになったのです。

こうしてできた作品は、二〇二一年の東京都現代美術館などでの「GENKYO」展の最後の部屋で展示しましたし、そこから続く「寒山拾得」シリーズもその流れにあります。

画風の変化も含め、
僕は変わったということを
ポジティブに考えています。
この年になって新しい画風を手に入れた、
これは大いに喜ぶべきことでしょう。

CamScannerでスキャン

ハンディキャップが自然体

難聴から始まって五感が全滅のような状態になると、あれもできない、これもできないという状態になる。そうなる前と比べると、どうしても落ち込むことばかりになります。そこで僕は、「ハンディキャップが自然体」と考えるようにしました。体のどこかが不自由になれば行動はもちろん制限されますが、その制限が「すごくいい」と感じたのです。

制限がなく、なんでも思ったようにできると、どんどん行動の領域を広げていくことになって、同時に思いや迷いも増えていきます。さきほども難聴や腱鞘炎が創作に役立ったことを話しましたが、制限のある状態、いわばハンディキャップのある状態を「自然体」と考えれば、心が落ち着いてきます。

芸術家とハンディキャップの関係で、睡蓮の絵で有名なクロード・モネの例をあげましょう。モネは晩年に抽象的な風景を描き、抽象画の先駆的な作品として評価されています。たとえば『バラの小道　ジヴェルニー』がそれです。どう見てもなぐり描きです。

モネは七二歳の時に白内障と診断され、八三歳で二回右目を手術し、八六歳で亡くなるまでジヴェルニーの庭を描き続けました。この抽象的な画風は見えた通りに描いたものでしょう。だからモネに視力のハンディキャップがなければ、あの革新的な作品は生まれなかったかもしれません。

同じ印象派の画家のルノワールは晩年、リウマチで絵筆を握ることができなくなり、包帯の中に絵筆を通して絵を描きました。晩年のルノワールを訪ねたマチスがその様子を語っています。音楽の分野では、ベートーヴェンがあまりにも有名です。二〇代から難聴に苦しみ、四〇歳で完全に聞こえなくなっても、五六歳の死去まで歴史的名曲を数多く作りました。

ハンディキャップを抱えながらも創作を続けた芸術家たちの存在は、僕を勇気づけてくれます。

もちろん五感が衰えていく時には、この先どうなってしまうのか、肉体的感覚が全部なくなってしまうのか、という不安や恐怖がありました。そこで、五感が駄目なら第六感で描けばいいじゃないか、というふうに開き直ることにしました。第六感で描くといっても、別にトランスして意識を失って描くことではありません。頭で考えるのではなく直感で描こうということです。

現代社会、とりわけメディアの世界は、言葉中心の社会です。美術についても言葉で説明し、解釈しようとするし、現代美術は言葉や観念が優先するコンセプチュアルなアートになっています。最先端の現代美術では、一層その傾向が強い。それに対して僕は相対的な立場、つまり中心から外れたところにいると思います。

最初から、僕は言葉とか観念とかを必要としていなくて、むしろ邪魔になっ

ていたと思います。そういったものの支配下で描いた絵は、すごく理屈っぽい絵になっていましたから。

そう考えると、今回のさまざまなハンディキャップによって、言葉や観念から脱することができたともいえます。「捨てる神あれば拾う神あり」というけれど、困っていても何かプラスになることがあるものですね。

それに、感覚を優先しようとする僕の立場は、言葉で表すことができないからこそ絵を描くという点で、絵画の王道に近いのかもしれない。だから僕の作品を言葉とか観念で絵解きしようとしても、それは勘違いだと思います。

絵画制作に関すること以外でも、ハンディキャップにはメリットがありました。よかったのは、まず生活を整理できたこと。老齢になると確実に体の動きが鈍くなります。それに対して五感だけがしっかりしていると、体と感覚のバランスが崩れるというか、うまく調和できない。それが合致して、無理がなくなったと感じます。

もう一つは情報を整理できたことです。難聴になってからテレビや音楽は楽しめないし、映画もセリフをうまく聞き取ることができない。視力も落ちてきて、眼鏡屋さんで眼鏡を作ると、お店にいる時は合っているけど、家に帰って本を読むと三ページ目くらいからぼやけてくる。書評の仕事はリハビリのつもりでやっているけれど、本を読む機会はほとんどなくなりました。あれやこれやで情報に接する機会が少なくなっていったわけです。でも別にそう困ることはなくて、むしろ絵を描く時間が増えました。情報に振り回されることもなくなったし、ストレスも減っていきました。

先に開き直りのことに触れましたが、諦めることにも意味があります。諦観によって、絵が描けなくなるという不安や恐怖を乗り切れた面があるのです。人は、これを実現したい、あれを手に入れたいなど、さまざまな欲望を抱きますが、それが実現できなければ不満が生じるし、その先には恐怖のような感情が出てくるでしょう。それらを諦めてしまえば、実現しなくてもどうってこ

とはないのです。僕の場合は、長生きをしたいとか、前のような描き方で絵を描きたいとかいった欲望をあっさりと捨てることでした。

第2章で話したように、死に対する恐怖はとても強かったけれど、年を取ると、いつまでも生きているのは面倒くさそうだ、という気持ちに変わってきました。すると死は怖いものではなくなってきます。諦めれば恐怖感がなくなるという一つの例ですね。

そう考えると、老いるということは肉体は老化しても精神は目覚めていく、そういう状態になることだと思います。年を取るのも、体が衰えるのも悪くない。

老いるということは、
肉体は老化しても
精神は目覚めていく、
そういう状態になることだと思います。

ダラダラアートと雲を眺める日

ハンディキャップとつきあってやっていくしかないのですが、自由に手が動かせなくなって、思ったような絵が描けなくなった時は、この先どうなるのかと怖くなりました。

しかし見方を変えれば、絵を描くことに執着しているから、そういう恐怖感を持つわけです。そこで僕は、自分は絵を描くことに飽きているし、嫌なのだという結論を早々と出してしまいました。

飽きているのになんで今も描いているの、ということですが、嫌々描いた絵、飽きた気持ちで描いた絵がどんなものか自分で見てみたいという好奇心からです。それがモチベーション。

嫌々描いているということは自分を客体化することで、これは発見でした。自分を客体化して他人のように眺めるのは、普通はなかなかできないことですから。

そして自分を他人の視点で見ると、自分の中に嫌々人（いやいやじん）がいることに気がついた。これまでは、自分なりに納得する絵、満足する絵を描こうとずっと思ってきたけれど、こうなると、もういいや、あれこれやるのは面倒くさい、という思いが強くなってきました。

絵描きは頼まれもしないのに絵を描いています（もちろん例外もあるのでしょう）。頼まれないのに、求められないのに、なぜキャンバスに向かうのか。その問いに常に向き合っているわけですが、僕の場合は「嫌々」という答えが出たのです。自分は正々堂々、嫌々絵を描いている。でも、その嫌々がすごくいいのです。

僕は子どもの頃から、面倒くさがりだった。学校では先生から注意されたし、

本当は直したほうがよかったのかもしれないけれど、今はそれを活力として利用したほうがいいという考えです。

とはいえ、それに気がつくにはある程度の努力が必要かもわからない。完成を目指してかなり頑張った、しかし頑張り切れない。そこで未完でいい、面倒くさがりでいい、というところにいくわけですから。

僕の場合、その考えにたどり着くまでに一、二年、何もしない状態が続きました。『老子』という本の中に「無為自然（むいしぜん）」という言葉がありますが、そういう無為が続いたのです。

アトリエに来るけれど、何もしない。絵を描かない、本も読まない、散歩もしない、ただごろごろしている。退屈で、時間が経つのがすごく遅い。それでも何もしないでいると、そのうち何もしない一日が素晴らしい一日に思えてきました。怠けの思想です。もしかしたら、突発性諦観症にかかったのかもしれないけれど。

アトリエのベランダから空を見ていると、少しずつ雲が変化していくことが

わかって、それを見ているると退屈しないようになってきました。あの雲はどの方向に動くのかな、しばらくすると消えるのかな、あの大きな雲に吸収されるのかな、などと想像していると楽しくなる。退屈が快感になってきたのです。こんなことは社会的に何の役にも立ちませんが、これで十分でした。

それまでは社会的な意味・要求や自分の中の欲望に従って、自分の時間を決めていました。とくに若い頃は、仕事がなくなるのが怖くてたくさん仕事を受けて、忙しくしていた。忙しくないと自分ではないという感じ。だから、もしも何もやることがなくなったらどうしようか、誰も訪ねてこなくなったらどうしようかと、そうなることを心配していました。何もしない期間は、忙しくしていた時と真逆で、これは貴重な体験でした。

その何もしない期間があって、じゃあ無為の時間を利用して絵を描いてみようと思い立ったのです。嫌々描いた絵がどんなものになるのか、見てみようと。

こうして描いた絵はダラダラした絵になります。肉体が怠けているので、自

然にダラダラアートができてしまいます。かつての興奮しながら描いたような絵に対して、筋肉が脱落したような、文人画のような絵になってくれます。

自律神経には交感神経と副交感神経の二つがあって、交感神経は活動し緊張した時に、副交感神経はリラックスした時に活発に働くそうです。そうすると、僕のダラダラ絵は「副交感神経絵画」と分類してもいいのではないでしょうか。

五感は全滅だし、体力が衰えているけれど、それに反比例して絵が大きくなりました。そして画面が大きいと、体ごと画面にぶつかっていくように描くことになるので、僕のストレスをずいぶん減らしてくれました。結局、年を取ることに抵抗したり、反発したりしないで、それを利用すればいいということでしょう。

自分は正々堂々、嫌々絵を描いている。
でも、その嫌々がすごくいいのです。

寒山拾得との出会い

今年の九月に東京国立博物館の表慶館で「横尾忠則　寒山百得」展をやります。東京国立博物館で現代美術の個展が開催されるのはマルセル・デュシャン以来、国内作家では初めてかもしれない。僕が描いた寒山拾得の絵が一〇二点展示されます。

寒山拾得といっても知らない人が多いと思うので、少し説明しましょう。中国の唐の時代、寒山と拾得という風変わりな二人の僧が台州（現在の浙江省）の天台山国清寺にいたという説話があります。この二人は僧ですが、衣食住に無頓着で、大声でわめいたり、大笑いするなど奇妙な行動をする人物でした。実在したかどうかは不明ですが、その二人は悟りを開いたものとされ、寒山が

文殊菩薩、拾得が普賢菩薩の化身とされています。

俗世を離れた風狂の人として禅の世界で尊重されたことから禅画、水墨画の題材となり、日本でも江戸時代には曾我蕭白、与謝蕪村など、多くの画家たちに描かれていました。この二人はぼろを着て、ざんばら髪で薄笑いを浮かべ、寒山は巻物を、拾得は箒を持っている姿で描かれています。また、寒山、拾得と豊干（国清寺に住んだ禅僧で、寒山拾得と親交を結び、二人を養っていたといわれる）の三人が作ったとされる漢詩は「寒山詩」と呼ばれています。明治時代に入ると、寒山拾得は画題に取り上げられることもなくなり、ほとんど忘れられた存在になってしまいました。

僕が寒山拾得に興味を持ったのは、曾我蕭白からです。蕭白に関心を持ったきっかけは一九七〇年代に辻惟雄先生の『奇想の系譜』を読んだことです。画集では満足できず実物を見たくなって、京都や三重の博物館・美術館だけでなくお寺にまで足を延ばしました。

蕭白の絵は気持ちが悪い。だけどその気持ち悪さにどうしようもなく惹かれます。人物の不気味な表情やダイナミックな姿が魅力的です。さらに人物だけでなく、背景の波や岩、植物、雲や竜巻など、あらゆるものが生命を持っているかのように躍動している。デモーニッシュなものがあって、それが僕の肉体感覚を揺さぶるのです。

蕭白に接した時、「竜巻に巻き込まれて泥沼と化した田圃の中に突き刺さった美麗なる簪」というイメージがいきなり浮かびました。ロートレアモンという詩人が「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶発的な出会い」（『マルドロールの歌』）と書いていますが、それに近い感覚です。日本の絵画では見たことのない奇怪な絵ですが、その奇怪さが美しいのです。蕭白はモダニズムではぜったいに出てこない画家だと思います。

じっくりと蕭白の寒山拾得を眺めたのは、「古典×現代2020」（二〇二〇年、国立新美術館）という展覧会がきっかけです。この展覧会は日本の古典作

品と現代作家を同じ空間に展示するというもので、八つの組み合わせが作られました。そこに「蕭白×横尾忠則」というコーナーが設けられ、蕭白と僕の作品が並ぶことになったのです。

会場には蕭白の「寒山拾得図屛風」が展示されるというので、それなら僕も寒山拾得を描いてオマージュを捧げようと考えました。そこで寒山に巻物の代わりにトイレットペーパーを、拾得には箒の代わりに電気掃除機を持たせました。また一九六五年のポスター『TADANORI YOKOO』で登場させた首吊りのロープを、自我を殺した（滅却した）ことの象徴として描き加えました。蕭白の作品は墨で描かれたモノクロの世界なので、カラフルな世界にしてみました。すると、トイレットペーパーを持っているのだから便器を置いてみようとか、寒山、拾得、豊干の三人に便器を跨がせてみよう、名画の中に二人を入れてみようなどと次々にアイデアが出てきます。

東京都現代美術館などでの「GENKYO」展の最後の部屋に寒山拾得シリーズを展示しました。あの部屋を見てくれた人たちから、これまでの流れとは違

う画風の作品が並んでいたので、驚いたという声を聞きました。また、それまでに過去に描いてきた作品の部屋がいくつもあって、最後の部屋で全部開放された、そういう声もありました。

このシリーズは腱鞘炎などのハンディキャップを抱えながら描いたものなので、画風が変わっているのです。五感の衰えがあるから、社会の役に立たない寒山拾得を自分と近いものと感じられた気もします。そうすると、難聴がこのシリーズを生んでくれたといえるのかもしれません。

その後もこのシリーズを描き続けて、急性心筋梗塞から回復してからも描き続けて、一〇〇点を描き上げました。展覧会は当初は「横尾忠則　寒山拾得」展というタイトルでしたが、一〇〇点描いたので「寒山百得」展としました。それにもう二点を加えて一〇二点で展示します。

博物館に展示されるというと標本が頭に浮かびます。動物や昆虫や植物や鉱物などの標本です。今回の展覧会は、寒山拾得に扮（ふん）した僕が昆虫となった寒山

拾得を捕虫網で捕らえようとする、そんな展覧会になるかもしれません。どうぞご期待！

CamScannerでスキャン

背景の波や岩、植物、雲や竜巻など、
あらゆるものが
生命を持っているかのように躍動している。
蕭白は僕の肉体感覚を揺さぶるのです。

CamScannerでスキャン

寒山拾得は僕の精神的アイドル

寒山拾得の絵を一〇二点描いたと言いましたが、一つの画題で短期間にこれだけの点数を描いたことはこれまでなかったことです。寒山拾得は僕にとって特別な存在といっていいのかもしれません。

寒山拾得は着るものはぼろで、髪や爪は伸び放題、住まいは山の中の洞窟で、食べ物は時々国清寺の僧から分けてもらうなど、生きることに無頓着です。またその表情に知性を感じることはできません。仙人どころか、まるでアホのようです。

たとえば森鷗外は『寒山拾得』という短編小説で、次のように書いています。

台州の知事のような立場の役人が豊干から台州で会うべき人として寒山と拾得

の名を聞いて、山を登ってはるばる国清寺まで訪ねて来ます。二人を前にして自己紹介をすると、二人で顔を見合わせて腹の底からこみあげてくるような笑い声を出したかと思うと、いっしょになって立ち上がって、厨（くりや）を駆け出して逃げた。

黒住教の開祖の黒住宗忠さんは、人相見に「あんたはアホの相をしている」と言われて、怒るどころか、「私は長年アホになる修行をしてきた。こんな嬉しいことはない」と大いに喜んだそうです。僕は何回かこの話をしていますが、これが霊性に繋がる大切なことだからです。つまり美の悟性を得ると、人は寒山拾得のようなアホ顔になると思っているのです。

人間は物欲、名誉欲、権力欲などさまざまな欲望を持ち、その欲望を満たすために生きているように見えます。けれども死に直面した時に、また向こう側の世界に行った時に、お金や地位や権力や知識といったものが何の役に立つのでしょうか。黒住宗忠さんが言っているのは、人にとって一番大切なものを求めなさいということでしょう。

寒山拾得は運命と闘うこともしていません。自分のアイデンティティを貫くため、守るために譲れないものがある、といった自分で枠を決めるような生き方とは無縁です（そもそもアイデンティティなんて考えていないかもしれませんが）。

寒山拾得のように、あるがままを生きることが大切だと僕は思います。この二人は「死んだふり」をして生きているのかもしれません。そうでないとあんなアホな存在にはなれませんから。三島由紀夫さんが「知性ではなく霊性を極めなさい」と言っていましたが、寒山拾得は霊性の象徴です。

僕は寒山拾得が透明人間だと考えています。突飛な発想のようですが、存在しているかどうかもはっきりしないでいて、自由自在に壁をすり抜けて、傍若無人に振る舞う様子に透明人間を感じるのです。しかも時空を超えて、現実の裂け目からヒョイと顔を出します。事実、芥川龍之介は夏目漱石の家からの帰宅途中、飯田橋で寒山拾得を一瞬見たと書いていますから。

僕は全ての人の中に寒山拾得がいると思います。けれどもそれを表に出したら、それが暴れ出して社会生活ができなくなる可能性がある。だからみんなそれを抑えている。それなら僕は絵の中で、寒山拾得を暴れさせてみようと考えました。絵に描くのは僕の自由ですから。

この二人は聖と賤（せん）が同居しているような多様性を持った人物です。僕もその絵を描く時、その人物像をこういうものだと決めずに、それに合わせて表現のテーマと様式を決めないで、とにかく描くだけ描きました。思いついたありとあらゆるものを描いたので、統一感のない一〇二点ができました。それが僕にとっての寒山拾得で、一つの様式で全部貫いたら、それは寒山拾得ではなくなっていたと思うのです。

僕はその日の気分で描いていったわけですが、たぶん寒山拾得もまた、その日の気分で生きていると思う。そういう意味でも寒山拾得にふさわしいスタイルだったでしょう。

寒山拾得の世界には、政治も経済もないし、教育も科学もない。現代の理想

CamScannerでスキャン

とする人物像からはもっとも離れた人物かもしれません。けれども、そこに本当の自由がある。だから寒山拾得は僕の精神的アイドルなのです。

CamScannerでスキャン

寒山拾得の世界には、
政治も経済もないし、教育も科学もない。
けれども、そこに本当の自由がある。

CamScannerでスキャン

「こんなん描けましたんやけど～」

第1章で触れましたが、僕は二〇二二年の七月に急性心筋梗塞になりました。この寒山拾得シリーズはこの時期を挟んで描いたものです。その前と後で絵がどう変わったかということですが、心筋梗塞の後は、正直、何かどうでもいいという感じになってきました。死にそこなったわけですから。

展覧会で見てもらえば、どの辺から変わったかわかると思います。僕はもともと特定の様式を持っていないけれど、今回は今まで描いたことのないような描き方になっていて、その変化が見てとれるはずです。

その「どうでもいい」というのは、いい加減、いい湯加減みたいなことです。

どこかにいい加減さがないと、一〇二点も描けない。描いた絵は「こんなものができてしまった」と、本人も唖然とするような絵でいいと僕は思っています。昔、女性の占い師で「こんなん出ましたんやけど〜」とか言っていた人がいるでしょう、尼さんみたいな格好していて。泉アツノさんだっけ。僕の絵も「こんなん描けましたんやけど〜」です。

他人事みたいに聞こえるでしょうが、本当に他人事なんです。

僕が描いてはいるが、僕という存在自体があやふやだから、僕の絵だといわれても自信がない。全部自分の絵だけれども、全部自分の絵でもない。このシリーズの中で代表作はどれかと問われても、全部代表作だし、代表作がまったくないかもわからない。

ご飯を食べるように日常的に描いているのが一番で、それだから一〇二点もできたのです。一点一点頑張って、この作品が自分だ、俺だといってやっていると、とてもこの数には到達できない。いちいちこれが自分の作品だと納得し

ながら描いていたら、せいぜい二〇から三〇点くらいしかできないんじゃないかな。

コロナも影響しているけれど、僕はここ数年で、生活と創作がより一体化したように感じています。その前は生活と創作が切り離されていた。生活のほうは、たとえば旅行するとか、お芝居に行くとか、誰かに会うとか、いろいろなことがある。それは絵を描くこと、つまり創作とは別でした。

ところがコロナで外に出るなということになったし、人とも極力会わなくなった。生活がアトリエの中だけに切り替わったわけです。アトリエの中で何をするかというと、絵を描くことしかない。こうして生活と創作が一体化してしまった。

それは僕にとって非常によいことでした。つまり、描くことが生活になって、ことさら構えないで制作ができるようになったのです。急性心筋梗塞の後は、その自然に絵が描ける状態がさらに進んでいった気がします。

絵の描き方でいえば、僕は早く描くタイプだと思う。描き続けるつもりならば、絵の具を盛り上げて一年でも二年でも、一点を描き続けることはできるでしょう。でも僕はすぐに満腹になるというか、長い日数をかけて一点を描くなんてことはやらない。

どこで完成とするかという点では、このあたりで止めていい、と思うところで一応の完成にしています。ところが絵のほうから、もうこの辺で止めたらと言ってくる時もあるし、もっと描き込んでくれという時もあります。その意味で、絵と対話しながら描くというやり方をしています。急性心筋梗塞以後は、無理しなくてもいいじゃないかと、絵のほうが僕をいたわってくれている気がしますが。

絵からの声に耳を傾けているといっても、そんなに特別なものではなくて、これ以上描くとToo Muchになるという感じを絵から受け取るわけです。そして、僕がもう疲れた、この絵にはもう関わりたくない、早く次の絵に行きたい

となると、これは未完だと思っても、それ以上は踏み込まないで、そこで終わりにします。

その意味ではすべてが未完です。だけど、単なる描き残した未完ではなく、未完に見せかけた完成というべきかもしれません。だって、それ以上筆の入りようがないのです。

今日一日が無事に終わりましたといっても、時間はずっと流れているから、どこが終わりかはっきりしていない。夜中に起きていれば、深夜の一二時になったからといって、その日が終わったという感じにはならないでしょう。絵の終わりもそれと同じです。絵を描くことが日常の行為になると、どこで終わるかがはっきりしなくなるのです。

しばらくしてまた描き加えたり、直したりということは、もちろんあります。今回の「寒山百得」展で、一〇二点を描いて東京国立博物館に搬入する時に、十数点はアトリエに残しました。まだ描き足りないので手を入れるつもりだったけれど、実際に手を入れたのは三点だけ。見ているうちに、描き足してもあ

まり変わらないと感じるものが多くなって、そのまま博物館に入れました。直した三点はバックの色をがらっと変えました。また少し手抜きと思われる部分を描き込んだり、文字を入れてみたりしました。

全部完成させようという気持ちが出てくると、油地獄に落ち込んだようになって、止まらなくなります。やり出したら、きりがない。それにキャンバスに手を入れていない部分があっても、そこに描き込むことで絵が崩れてしまうこともあります。

だから未完といえば未完だけど、僕は「未完という名の完成」だと思っているから、それでいいんじゃないですか。

人間は未完で生まれて、完成を目指して未完で生きて、未完で死ぬ——それと同じです。

実は『モナ・リザ』も『ゲルニカ』も未完成の作品です。ダ・ヴィンチは旅先に『モナ・リザ』を運んで手を入れていたそうです。この作品の妖しい魅力

は、ちゃんと描かれていないマユゲにあると僕は思います。一方『ゲルニカ』には、至るところに描き損じや消し忘れの部分があります。未完の中に、ピカソの迷いを垣間見ることができます。

未完には人を惹きつける何かがあるのです。それは、未完の作品を見た人が、無意識で想像力を働かせて、その先を頭の中で描いているからかもしれません。といって意図的な未完はコンセプトになるので、つまらないです。描き切った結果、描き切れなかった絵が未完です。

「寒山拾得」シリーズは、この展覧会で区切りにするつもりです。一〇二点描いていて、後半に入ると、なんとなく自分でもシリーズの整理を始めたような気がしました。整理というのは、起承転結の「結」を作ろうという働きが自分の中で出てきたということです。

僕は即座にやばいな、と思いました。このシリーズを中途半端のままに置きたかったから、整理をし始めた自分をやばいと感じたのです。それで「寒山拾得」はここでやめることにしました。卒業です。次のテーマは決めていないけ

れど、そこに置いてある白いキャンバス、あれが次のテーマの第一作になります。

CamScannerでスキャン

心筋梗塞以後は、
無理しなくてもいいと、
絵のほうが僕を
いたわってくれている気がします。

CamScannerでスキャン

自分の寿命、絵の寿命

「寒山百得」展の後に何があるかは、僕の体力と寿命によります。

新聞を見ると、僕の年代、八〇代の終わりから九〇代の初めの人がよく亡くなっている気がします。今年の三月には、近所にお住まいの大江健三郎さんが八八歳で亡くなられました。道で会って立ち話をすることがありましたが、「アメリカの画家エリック・フィッシェルをどう思われますか」といきなり大江さんに質問されました。「フィッシェルは現代の病めるアメリカの社会を描いているように思います」と答えると、「それを聞いて安心しました。では失礼」とそのままお宅に帰られる、そんなこともありました。

僕はそんなに先まで生きるという感じが自分の中にありません。それがいつ

CamScannerでスキャン

来るかわからないけれど、九七歳とか九八歳まで生きるとは思いません。もっと手前、九〇を境にするとあと三年、その辺で作品の限界が来たら、それまででしょう。それもこれも、決めるのは宿命です。

二〇二三年九月から「寒山百得」展をやった後は、二〇二四年に海外の美術館から回顧展の依頼が来ています。また、二〇二五年にも国内の美術館での個展の依頼が来ています。そのあたりになんとなくフォーカスしています。そのあたりが絵の寿命であるし、自分の寿命でもあるんじゃないかと思います。

絵が描けない状態で何年も生きるというのは、ほとんど意味がないと僕は思う。映画監督のジャン＝リュック・ゴダールは昨年（二〇二二年）九月に安楽死しています。九一歳でしたか。映画が作れなくなって、その選択をしたといわれていますが、自分の思うような映画が撮れないなら、生きていてもしかたがないと思ったのでしょう。

僕が一番いいと思うのは、絵の死と自分の死、絵の寿命と自分の寿命が一致することです。絵の死とは何かということですが、絵を描くことに意味がなくなって、絵を描く必要がなくなることです。

僕はだいぶ前から絵を描くことに飽きちゃっているけれど、前にも書いたように、飽きて描いた絵がどんなものか見てみたいという好奇心があります。それがなくなった時が絵の死で、そのことと肉体の死が一致してくれればいい。絵は死んでいるのに体はまだ生きていて、絵を描かないで一〇年も生きるなんてことはしたくないですね。

作家では、ペンを握ったまま死にたいという人がいるかもしれません。テレビの世界から文学に転身した久世光彦さんは夜中に原稿を書いていて、朝、家の人が見に行ったら亡くなっていたそうです。久世さんの場合、本人の死と文章の死が一致していればいいと思う。あれも書きたかった、これも書きたかったという思いを持ったまま死ぬのはちょっとしんどい気がします。

死ぬ時は「もう十分、後はやることがない」というのが一番いいと思う。そうなると思いや執着を向こうに持っていかなくて済みますから。僕自身、あれも描きたい、これも描きたいと思って死ぬと思いが残ってしまうでしょう。それは少し厄介ですね。

いつ死ぬかわからないから、今、これで思い残すことはない、いつもそう思っておくことが大切です。これが自分の最後の一作だと思って描けば、思いが残らない。いつもその気持ちを持ち続けて、それを支える肉体がどこまで対応できるかということになります。

じゃあ、僕が今そういう気持ちで描いているのか、といわれると、残念ながらそうではないです。今死んだら絵のほうが長生きするから、まずい。つまり、僕にはまだ絵が必要なのです。また絵が先に死ぬと、生きている意味がなくなってしまう。絵の死と自分の死が一致するのが理想的だけど、まだ一致していない。そのために、もう少し自分が生きていないと絵に申しわけないと思うのです。

CamScannerでスキャン

死ぬ時は
「もう十分、後はやることがない」
というのが一番いい。
思いや執着を向こうに
持っていかなくて済みますから。

CamScannerでスキャン

横尾忠則
よこお・ただのり

美術家。1936年兵庫県生まれ。72年にニューヨーク近代美術館で個展。その後もパリ、ヴェネツィア、サンパウロなど各国のビエンナーレに出品し、世界各地の美術館で個展を開催するなど、国際的に高い評価を得ている。また東京都現代美術館、東京国立博物館など国内でも相次いで個展を開催し、2012年神戸市に横尾忠則現代美術館、13年香川県に豊島横尾館開館。95年毎日芸術賞、11年旭日小綬章、朝日賞、15年高松宮殿下記念世界文化賞、令和2年度東京都名誉都民顕彰、23年日本芸術院会員。著書に小説『ぶるうらんど』(泉鏡花文学賞)、『言葉を離れる』(講談社エッセイ賞)、小説『原郷の森』ほか多数。

編集協力／及川道比古
本文DTP／高羽正江

CamScannerでスキャン

ポプラ新書

244

時々、死んだふり

2023年9月11日 第1刷発行

著者
横尾忠則

発行者
千葉 均

編集
浅井四葉

発行所
株式会社 ポプラ社
〒102-8519 東京都千代田区麹町 4-2-6
一般書ホームページ www.webasta.jp

ブックデザイン
鈴木成一デザイン室

印刷・製本
図書印刷株式会社

© Tadanori Yokoo 2023 Printed in Japan

N.D.C.914/190P/18cm ISBN978-4-591-17897-3

落丁・乱丁本はお取替えいたします。電話（0120-666-553）または、ホームページ（www.poplar.
co.jp）のお問い合わせ一覧よりご連絡ください。※電話の受付時間は月～金曜日、10時～17時です（祝
日・休日は除く）。読者の皆様からのお便りをお待ちしております。いただいたお便りは著者にお渡しいたしま
す。本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用で
あっても著作権法上認められておりません。

P8201244